

夜の王と魔物の王

変人集袋

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

偉大なる夜の王。

偉大なる魔物の王。

彼らが出会った時、本来紡がれる筈の物語は
如何変わるのだろうか？

??注意！この褪せ人は不思議な力（エルデンリング）を手に入れてとても強くなつて
います！もしかしたら気に食わない場合があるのでその場合は直ちに閲覧を中止して
下さい！

略・嫌なら見るな

また、この小説は原作を読んでいない方には伝わらない部分が出てくる可能性があります。何卒、ご容赦下さい。

あと亀投稿です

どんくらいかというと数ヶ月空くことがある程です

目次

| | | | |
|---------------------|----|----|------|
| 物語の始まり | | | |
| 増える仲間達 | | | |
| 運命の人、新たな姿、飢えた豚と喰われた | | | |
| 鬼 | | | |
| スライム2度目のやらかし、鬼の目覚め | | | |
| 続く鬼の目覚め、あとスライムの目覚め | | | |
| 101 | 90 | 58 | 31 1 |

物語の始まり

：落ちた葉が伝えている

偉大なる、ヴエルダナーヴアは死んだ
次元の彼方、見知らぬ異郷、魔大陸で

竜皇女ミリムは残され

美しい、夜魔の女王が生まれた夜、神祖が次に死んだ
神祖の成果たる亜人と人間たちはその知恵故に歪み、狂い、
終わらぬ争いの末に

大いなる星王竜に、見放された

おお、だからこそ褪せ人よ

王となり、なお死にきれぬ英雄達よ

かつて我等を導いた祝福が、再び我等を呼ぶ

暴風竜、ヴエルドラよ

爆炎の支配者、井沢静江よ

迷宮、ラミリスよ

ラビリンス

シズエ・イザワ

策謀の ユウキ・カグラザカ
 神樂坂優樹エイチアルモノ
 導きの大賢者よ

そして、失われた祝福は三度、もたらされる
 エルデの王となつた、褪せ人の元に
 次元の彼方に向かい、魔大陸に至り
 魔大陸の王となる者に見えよ
 そしてその王と共に歩むが良い

俺はリムル。通り魔に刺されて転生し、スライムになつた。

こんな異常事態でも落ち着けているのは俺のスキルの大賢者のおかげだ。（説明的自己紹介）

落ち着けたとしても何もすることがないから
 草食つたりとかしかしてなかつたんだけど：

「…（パツチ座り）」

誰コイツ。何かいつの間にかいた。草食つてたら
 新しい草持つてくるし、たまに撫でてくる。

大賢者。コイツ何？

《解。不明。装備している防具には『投擲壺威力上昇』

『足音完全抑制』『戦技攻撃力大幅上昇』

『戦技消費F P低下』などの能力が確認されました。

また、全属性に対する微量の耐性も確認されました。》

何か色々気になる単語が出てきたな、コイツ。

また撫でてきた。優しい撫で方だ。

まあ悪いやつじゃないのか？！鎧はかつこいいけど何で壺被つてるんだ？まあ壺男（仮）とでも呼ぼうか。

まあ今の目的はここからの脱出だ。そろそろ出発するとしよう。

特に何事もなく進み、地底湖から地上へ至る洞窟を進むと、扉があつた。

水刃で切り刻もうかと考えていると壺男が扉を開けてくれた。バキッて音したけど。気が効くじゃないか！壺男に感謝を示し、進もうとするといきなり持ち上げられて物陰に引きずりこまれた。

何すんだ！と、思つたんだが

「あれ！何で開いてんだ!?」

「えー…それ大丈夫なんですかー？」

「鍵もぶつ壊れてる…」の中でも生まれたモンスターが
外に出たと考へるべきだな…」

なんだか騒がしい3人組が入ってきた。

そう言えど何で言葉が分かるんだ?

《解》意志が込められている音波は、魔力感知の応用で理解できる言葉へ変換されま
す。』

ほーん。現地語を覚えなくていいのはいいな。

壺男は…頭を抱えていた。まあ鍵を壊した張本人なんだから当然つちや当然だな。

3人組の様子を伺つてみると痩せ気味の男が何かしたのか、急に3人の姿がぼやけ
る。でも見えないほどではない。

モンスター対策かなんかだろうか?

俺がそんなことを考へていると、3人は奥へ進んでいった。

3人の気配がなくなつたのを確認し、移動を再開する。

壺男も付いてきてるな、ちょっとしょんぼりしてると

こうやつて見てみるとスタイルいいな:何でこんなところいるんだろうな。

暫く進むと道が複雑に分岐している地点に到達した。

どれが地上への道なのかなんてわかる訳ないので壺男に適当に進む道を指し示して

から進むことにする。

「…（リングのポーズ）」

大丈夫らしい。選んだ道を進むと、
チロチロリ！

目が合つた。前世とは比べ物にならないくらいでかい蛇。

硬そうで、刺々しく真っ黒な鱗。めっちゃ強そう。

俺がビビり散らかしていると、壺男が前に出た。壺男がいつの間にか武器を持つている。

でかい剣だ！どこにしまつてたんだ！？

壺男は剣を片手で構え肩に担ぎ、片手を地面についた独特の低い姿勢をとると、横に回り込んで、跳んだ。

空中で一回転し、その勢いのままに大剣を黒蛇の首に振り下ろした。

その一撃で黒蛇の首をいとも容易く刎ねた。

驚く程の速さだった。回り込みも一瞬消えたように見えたし、あの斬撃も恐ろしい威力だ。すると壺男が黒蛇の身体と首をこつちに持つてきた。これは…喰えつてことか？

せつかくだし捕食して解析することにする。

壺男は嬉しそうだ。黒蛇を捕食したら『熱源感知』と『毒霧吐息』というスキルを得した。

さて、本来の目的はこの洞窟から脱出することである。
まだまだ進んでないからな、どんどん進もう。

黒蛇戦から三日たつた。俺も戦わせてもらつて『水刃』をマスターした。しかし、一向に脱出できない。壺男が色んな色に光る石を置いてくれてお陰で同じところをグルグル回ることは回避出来ているが、どうしたものかなんかな…

なんかいい方法無い?

『解。脳内に、現在通つた道を表示しますか?』

!?そんな便利な機能があるのか!早速使つてみよう!
…おかしい。何で同じところをグルグルしているんだ?

進んで無い方向に行つてみると、巣を光る石で飾り付けた蜘蛛を見つけた。お前か:
その蜘蛛を『水刃』で切り刻んで捕食してやつた。その間壺男は光る石を回収して
た。貴重品なんだろうか?

さあ、漸くまともに進めるぞ。

』

段々地表に近づいてきたのか雑草が目立つようになり、薄明るくなってきた。モンスターも増えてきたがな。

全部倒して捕食した。すると、スキルも必然的に増えるわけだが、その中に気になるスキルを見つけた。

吸血蝙蝠の『超音波』だ。『吸血』？ 捕食者の下位互換！ 以上！

そんなことよりもこれを使いこなせれば喋れるようになれるかもしない！
さあ特訓だ。これからの方にもこれは必須だぞ。

……

……

……

不眠不休で歩きながら研究した結果。

「ワレワレハ、ウチュウジンデアル！」

成功だ！ 扇風機の前で喋った様な声だが、発声に成功した！

ただ、壺男が耳（？）を抑えていたので音量を調整する必要があるかもしれない。

暫く練習していい感じの音量になつたと思うので、壺男に話しかけてみることにし

た。

「聞こえるか？」

壺男がうなづく。

「俺の名前はリムル・テンペスト。お前の名前は？」

やつと聞けた。壺男つて呼ぶわけにはいかんからな。

「…」

あれ？ 何で黙つてるんだ？ 怒らせちゃつたか n

「…ワ…ワシ…ノ…」

聞こえた！ 若い男の声だ。男と言うか少年？ つてかワシで。

「…ナマ…エ…ハ…uhh…ahh…名前は…シルシティ。シルシティだ。」

「シルシティか！ 改めてよろしくな！」

「ああ、よろしく頼むよ。」

これで会話するのは二人目だ。どうやら声を出すのが久しぶりだつたからか、うまく出なかつたらしい。せつかくだし色々話したいな。

（

「お前ヴエルドラは知つてるか？ でかい竜なんだけど」

「ああ、あれか。見つけた時にはもう飲み込んでいる最中でな」

「そうか…お前もヴエルドラを解放したら話すといいよ。いい奴だよ。」
「うむ。是非させてもらおう。竜と話す機会なんてなかなか無い。」

「そういえば何でお前はあそこにいたんだ?」

「いや、いつの間にかいたんだよ。そしたらドラゴン取り込んでるスライムがいるわけだ。面白そうちから着いていこうとおもつての。」

「その壺と鎧は?」

「この壺は友からの贈り物でな、きっと似合うと言つてくれたからずつとつけてる。鎧は見た目が好きだからだな」

「あの大剣は? 中々の業物じや無いか?」

「腕のいい鍛治土がいたからな。他にも色々あるから機会があつたら見せてやろう」色んなことを話した。壺がそんな大切な物だったなんて……あと聞いた感じだと彼は転生者と言うより転移者だろう。鍛治土とか鎧とかもう俺のいた世界じやないの確定じやん……

話しながらも迷わず上に向かっている。

段々明るくなつてくる。そして遂に……

「外だ! おい見ろ太陽が見えるぞ!」

「おお、太陽だ! 太陽万歳! (太陽贊美)」

「お、何それ! 僕もやる! (太陽贊美)」本来褪人は太陽贊美はできない
スライムの触腕を伸ばしてポーズを真似る。

俺たち一人の機嫌は最高潮に達していた。

数ヶ月ぶりの太陽だぞ？ テンション上がるに決まつて。

ある程度ふざけて気が済んだ俺たちは、

森か
一

「どうしたシルシティ？森でなんかあつたのか？」

「…恐ろしい話を良く聞いたからなあ。まあここではないだろうが」

「八」

目の前の森について話していた。

とりあえず真っ直ぐ進むことにした。何もわからんからな。

「ガルルルルル」

「あん？」

「キャイ——ーーーーン。」

「今のはあれか？スキルってやつかの？」

「いや、凄んだだけなんだが…」

旅は順調に進む。木端の魔物は少し睨むだけでどうにかなる。そんな事を繰り返し

ているうちに俺に近づくモンスターはいなくなつた。

日が傾き始め、俺が野営の提案をしようとした時だつた。

俺の魔力感知が30匹程の魔物を感知した。
しかしあまり強くなさそうだ。

「おйルーン、なんか来るぞ。」

「強そうかの？」

「いや全然。俺一人でもどうとでもなるな。」

「ヴエルドラ以外全部 そうなんじや無いかね」

軽口を叩いていると件の魔物が姿を現した。

その魔物は全身霞んだ緑色で小柄だつた。耳は少し尖つていて粗末ではあつたが盾や剣、斧や弓を持つ個体もいた。

そう！俺たちの前に現れた魔物はゴブリン小鬼族だつたのだ。

でも、やつぱり怖くないな。どうしてくれようか：

そんなことを考えていると群れのリーダーらしき個体が話しかけてきた。

「グガツ、強キ者ヨ……コノ先ニ、何力用事ガ、オアリデスカ？」

ゴブリンって喋れるのか。魔力感知の応用で分かるのかな？
つて強き者つて俺たちのことか？ルーンの方を見てみる。

(がんばれ)

そんな感じの顔？とジエスチャーをしていた。おい！

まあ、世話になつてゐるし、任されてやるか。

「初めまして、でいいのかな？俺はスライムのリムルといふ。この先には別に用事があるわけではないが」

「名持チノ方デシタカ！ 実ハコノ先ニ我々ノ村ガアルノデス。強力ナ魔物ノ氣配ガシタノデ、警戒ニ來タ次第デス」

「強い魔物の気配？ そんなのいるか？」

「いや貴公のことじや無いか？」

「俺そんなに強いか？ スライムだぞ？」

「少なくともわしはどこでかいトカゲや蜘蛛の首を簡単に刎ねれるスライムは見たことがないのお」

「オオ、ヤハリアアナタハ、オ強イノデスネ！ …トコロデ、隣ノ人間ノ方ハ？」

「リムルの友人つてどこかね。それなりに強いぞ。蛇の首刎ねれるからな」

「オオ、アナタモオ強イノデスネ！ …御二方、オ疲レデハナイデスカ？ セツカクデスシ、我々ノ村デ休ンデイツテハイカガデショウ？」

「…どうする？ 俺は行つてみたいんだけど」

「ワシもいいと思うぞ。行くあても無いしな。」

「まあ、それもそうだな。よし！ お前たちの村に案内してくれ。」

「ワカリマシタ！ サア、 コチラデス」

俺たちはゴブリンたちに色々な話を聞きながら村へ向かつた。
そして会話を続けている内に、相手の言葉をスムーズに聞き取れるようになつた。
『魔力感知』の応用でする会話に慣れてきたみたいだ。

人間と話す前にゴブリンで練習できてよかつたかも知れない。
そんな事を話しながら村に向かつたわけだが：

「…」

「…ふむ。」

村はえ？ 言いたくなるほど、小汚い感じだつた。

言わなかつたけどな？ 所詮ゴブリンの巣穴、期待してはいけなかつた。

俺たちはその中でも一番マシに見える建物？ に案内された。

「お待たせいたしました。 お客人」

年老いた一匹のゴブリンが入つてきた。

先ほどまで俺たちを案内していたゴブリンリーダーも付き添つっている。

「いえ、 それ程待つていません。 お気遣いなく」

「何、 最近は忙しいんじやろ？ みんなボロボロで疲れとるわ」

ルーンはこの村の事を先程の短い時間で把握したらしい。年の功つてやつかね。なんでそんなボロボロで疲れているかと言うと、3ヶ月ほど前に彼等が信仰する神が居なくなつて、魔物たちが活発化したらしい。装備も力も貧弱な彼等は格好の餌であり、つい最近名付きの戦士までもがやられたらしい。俺のせいかもしれん：

その戦士たちが命懸けで手に入れた情報によると牙狼族つて言うのがもうすぐ10匹くらいで攻めてくるらしい。ちなみにこいつ一匹でゴブリン十体で勝てるかどうからしい。

「…中々厳しいですね」

「厳しいってか無理じゃ無いか？」

言つたよコイツ。事実だけども。しかしルーンは続けて

「だから我々を雇いたいのだろう？」

!?何言つてんだコイツ！

「おいおい、俺はスライムだぞ？そんなに活躍できると思えんが」「いえリムル様、アナタからは恐ろしいほどに力が溢れております」

村長がそう言つた。どゆこと？

《告。現在、身体から魔素が溢れ出しており、それがオーラとして認識されているようです。》

え、マジ？ダダ漏れなの？

『はい。』

うわー…ちょっと恥ずかしいな。抑えれないの？

『解。可能です。実行しますか？』

ありがとう大賢者！そーかー、ダダ漏れだつたかー。それっぽいこと言つとくか…

「ふつふつふつ、よく分かつたな。君には見所がある。」

「おお、有難うございます。」

ルーンが震えている。笑いを堪えているらしい。シバくぞ。

「だが、ただで雇い入るのは違う。そうだろう？ルーン」

「くつくつくつ、えつ？くふつ、まあ、そうだな。」

まだ笑つてゐよコイツ。しかしツッコんでいる場合じや無い。

「そこ」でだ。お前たちは俺に、俺たちに何を差し出せる？』

すると村長を含めた全てのゴブリンが平伏し、村長が

「我々の忠誠を！心からの忠誠を捧げます！」

ええ：要らないよ、忠誠なんて。でも、覚悟はあるみたいだな。

「ルーン、お前はどうする？」

「うむ、ワシもお前たちを守つてやろう。人間と魔物合わせてもまともな奴は数えるほ

どしか出会えない土地に住んでいたからな。まともな奴等は護られなければならぬ。

仮定すると大多数が会話できない恐ろしい世界ということになる。

「さて、じやあ早速始めようじやないか」

「ああ、そうしよう。先ずは壁でも作ろうか。」

あれから俺達は村の強化と村人の治療を進めた。殆ど瀕死みたいな奴等ばっかりだつたからな。そして、時間が空いたので、シルシティにいろんなことを聞いてみるとした。

「…シリシティはさ、何処に住んでいたんだ？」

「……狭間の地と呼ばれる場所だ。まあ、貴公の思う通り君の住んでいた所ではないよ」「あ、やつぱり？」

「秘匿をかけてもらつた筈なんだが、…まあ、そんな秘密にすることでも無いし時間もあるから、わしの身の上を明かしておこう」

「お、気になつてたんだよ。少し楽しみだな」

⋮⋮⋮

シルシティは小国の騎士であつた。

恵まれた立地、肥沃な土地、豊富な鉱山資源。狙われるのは必然であつた。
しかしその国は負けなしであつた。シルシティの力によつて。

他の國のお座敷剣術ではお話にならない。優れた技量で剣を振るい、独特的の剣技で敵
を翻弄し、凄まじい生命力で生き残つた。

しかし他の騎士はそこまで強いわけではなく、最終的にはシルシティとシルシティ直
属の精銳対軍の戦いになつていた。そこからがシルシティの本領であつた。敵の剣や
盾、時には敵の死体を拾つてぶん投げ、敵の腕や脚、時には頭に直撃させた。百発百中
であつた。その様は獸の如く、いや化け物の如く。精銳達はそこまでの戦い方では無い
ものも、彼等もとても強かつた。

その戦い方はシルシティもそれを慕う精銳達も語らなかつたが、ある生き残りがそれ
を伝えたことでかれは呼ばれるようになつた。全てを使い、死者の死体までを武器にす
るものも、彼等もとても強かつた。

：「外道英雄」と。

ある時シルシティは追放された。その戦い方故に。その国の傲慢故に。英雄達がいると鷹を括つたが故に。

シルシティを慕つた英雄達と民達が怒り狂い、内乱が起きた。その国のトップは英雄達となり、それ以降も榮え、平和であつた。しかし彼等はシルシティを探さなかつた。シルシティの追放を言い渡された時の穏やかな笑顔を見て、連れ帰ろうと思うものは居なかつた。確かにそれはまともな道を外れた者であつた。それ以上にシルシティは英雄だつたのだ。

「最後の方誰から聞いたんだよ」

「その英雄達からじや。追放された時も旅立つ時も見送つてくれた。いい奴等だよ。年も若いのにねお」

「いくつぐらいだ？」

「よく戦つてたときで平均15ちょいぐらいだつたかね？」

「そんなのを戦わせてたのか？：ひどい王様だつたんだな」

「まあリンチされるような政治ではあつたな。あと、この話はここからが本番でこれは

前座だぞ

「波乱すぎだろ」

あてもなく放浪していシルシティであつたが、転機が訪れた。光が見えた。戦士の末裔、褪せ人達を導く祝福が。

ああ、これが祝福か。わしも、褪せ人だつたのか。シルシティは悟り、その導きに従うこととした。特にやる事も無いから。自分を慕つた英雄達にそのことと「着いて来るで無いぞ」と伝え、彼は旅立つた。霧の彼方、褪せ人の故郷：狭間の地へ。

狭間の地は恐ろしい土地であつた。百戦錬磨の英雄であつても太刀打ち出来ぬ化け物が跋扈する土地であつた。輪廻転生を司る律が壊れ、まともな者は数えるほどしかいなかつた。この旅の目標は王となること。彼は手段を選ばなかつた。多くの者を殺し、奪い、自らの糧とした。謎の『二本指』なる上位者も「奪え」とほざいた。言われなくとも、シルシティは略奪した。：略奪なぞせずとも、奴等は襲つてきたのだが。

旅の最中で多くのものを得た。多種多様な装備。生き抜く為の素材と製法書。驚異的な知恵^テ_スと力。そして多くの同志^{褪せ人}たち。それらはシルシティを強くし、王へと導いた。偉大なる、夜の王へ。

「夜の王つていうのがその国の王様なのか？」

「うーむ、なんて説明したもんか…王様の種類みたいなもんだな」

「ていうか、さつきの言い方だと、お前が王様みたいな感じだけど…その夜の王つて」

「もしかしなくてもわしだな」

「え？ 敬つた方がいい？」

「いらんいらん、夜の王つてのも名前だけだ。統治なんぞしとらんし」

「夜の王にはどうやつてなつたんだ？」

「それも話そう。リムルにはいろいろ話すと決めたからな。…この話が終わつたらリムルのこと教えてくれんか？」

「勿論だ。お前がこんなに話してくれてるのに、俺が話さないわけないだろう？」

ある時、シルシティは出会つた。隅々まで、罠が張り巡らされた「カーリアの城館」で。最初は大きな建物だから強い武器も有るだろう、という邪な考えであつた。実際にいい武器もあつたが、そんなのはおまけであつた。

親衛騎士を倒し、辿り着いたのは三つの塔が並ぶ霧のかかつた土地。魔術師喰らいの竜を追い払つて、真ん中の塔を登つていく。他の二つの塔は封印され

ていた。

しかし真ん中の塔は封印こそ無かつたが竜が護っていた。きっと良いものがあるに違いない。

俗物的思考で駆け登り、頂点に辿り着いた。

そこには魔女がいた。白いとんがり帽子をかぶつている。

良く分からぬまま話しかけてみる。

「ほう……貴公のようなもの（壺頭）を招待した覚えはないのだが、何用だ？」

「いや別に。」

「特に用は無いのか？」

「強いて言うなら強い武器を探していたのだが：貴女の様な美女に会えたのはよかつたかもしけんの。はつはつはつ」

「ふむ……どうだ？ 私に仕えてみないか？ 美女に仕えるなんて嬉しいんじゃないかな？」

「いいぞ。」

「即答か。欲に正直なのは悪いことではないと思うが……。しかし良いのか？ 私は暗い路を行く。いづれ全てを裏切るだろう：その中にはお前も含まれているかもしけん。」

「構わんよ。こちとらクソハゲ^{バツチ}に裏切られて崖から突き落とされたわ。貴女も裏切り、自分の目的を果たせ。なあに、わしも老人。若い者の役に立ち、死ねるのならばそれは

無駄な死ではない。金にがめついハゲに殺されかけるよりずつと良い。」

「そうか…面白い奴だな。では私の為に早速働いてもらうとしよう。まずは私に仕えて
いる他の者達に挨拶をせてくると良い。」

「おお、ぜひそうさせて貰おう。仲間がいると言うのは良い事だ」

「あとその鎧は女物だぞ」

「え」

「お前：その鎧つて」

「言わんで良い。大丈夫、割と女顔じやし、割と若いぞ？」

「じゃあなんで爺言葉なんだよ」

「精神年齢は別じや」

（

「新しい従者が増えたのは聞いたが、お前だつたのか。改めて俺は半狼のブライヴ。同
じ従者として、よろしく頼む。」

「ああ、こちらこそ。」

「今俺はシーフラ河でノクローンに通じる道を探している。何か分かつたら俺に教えに
来てくれると助かる。あと…えー…」

「おお、たっぷり撫でてやろう。それにわしがいれば頼み事なぞすぐ終わる。そうすればラニにも撫でてもらえるぞ！」

「…ありがとう。恩に着る」

「おお、貴方の事だつたのですか。こんなことになるとは私も見通せませんでした。改めて私は軍師イジー。宜しく頼みます」

「ああ、こちらこそ頼むぞ。」

「困つたことがあれば聞いてください。私は軍師。知恵を使う場でこそ輝けるものです」

「じゃあ王族の幽鬼の弱点を教えてくれんか？あいつ死ぬほど面倒臭いんだが」「うーむ：確かにアレは回復祈祷が効いた筈」

「マジかい：試してみよう。ありがとう」

「いえいえ、これくらい」

「私は魔術教授セルブス。君みたいな下郎と働くのは勘弁して欲しいところなんだが」

「シバクゾゴラア!!」

「ヒツ…。あ、ゲフン、まあ、頑張りたまえ」

（

それからは怒涛の勢いであつた。デミゴッド最強のラダーンが星の運航を妨げてい

ると分かつてからは腐敗に侵されたラダーンの供養ついでに星の運航を再開させ、落ちた星の下にあいた巨大な穴に突撃した。そこそこが永遠の都、ノクローンであつた。奥へ奥へと進んでいく。銀の雲と言ふ既視感^{アランクス}のある敵や夜人達の猛攻を打ち払い最奥の宝箱を開けると、一本の刃物が入つていた。『指殺しの刃』。それこそラニの求める秘宝。早速ラニに渡した。するとラニは

「感謝する。これで漸く全てが揃つた。後は私が行くだけだ。：私だけの暗い路を。」そして彼女は『カーリアの逆さ像』をシルシティに渡し、何処かへ消えた。隣の塔の封印が解けた。それは感覚で分かつたが、その像を使つてから行くことにした。

：詳しいことは省く。置いて、デブをしばいて、登つた。以上。狭かつたのでそれなりの死闘だつた。登つた先にあつたのは、『死のルーン』。かつて、神の身体に刻まれた『死』だ。それが刻まれた身体はボロボロではあつたが、かろうじて女の身体であることがわかつた。ラダゴン^力_知の光輪用の知力からもたらされた真実。それは、ラニが陰謀の夜の黒幕であると言う事実だつた。

指殺しの刃、死のルーン。おそらく彼女は神人である。それによつてもたらされる運命から逃れようとしているのだろう。そこには自由が無いから。それは良くない。だから貴公、逃げたまえよ。忌まわしい運命から。変な奴の傀儡なんてシルシティであつてもごめんである。

先程開いた3棟目の塔。そこにはラニの服と転送門があつた。転送門の先、地の底の河の岸の石の棺。その中には小さなラニの人形が。怒涛の旅は再び始まる。

「聞こえるかー」ユサユサ

「…ええい。お前、存外しつこい奴だな

それとも、人形に話しかける趣味でもあるのか

「しつこさだけならモーゴットにも負けんよ」

「確かにアイツは一度定めた相手は絶対に逃がさないからな。はあ…。知られてしまつたからには、逃がしはしないぞ。協力してもらおうか。この地にいる、災いの影を探し出し、消し去るのだ」

「もとより逃げるつもりなどない。見つけて、殺す。わかりやすくて良い」

「では早速行くが良い。…よいしょっと。この中（ポーチ）の中で待つているからな」

「ええ…」

「…少し、昔話をしようか。私は、かつて神人だつた。デミゴッドの中で、ミケラとマレニア、そして私だけがそれぞれの二本指に見出され、女王マリカを継ぐ、次代の神の候補となつたのだ。だから、私はブライヴを授かつた。神人の特別な従者としてな。」

「あいつそんな凄い奴だつたんか」

「…そして私は、二本指を拒んだ。死のルーンを盗み、神人たる自らの身体を殺し、棄てても私は、あんなものに操られたくはなかつたのだ。」

「分かるぞ、なんかうねうね動いて氣色悪いしの」

「分かつてくれるか？…それ以来、私と二本指はお互いを睨つてゐる。災いの影とは、あやつの刺客なのだよ」

「…私が、二本指を拒んだ時、それでもブライヴは、私の味方でいてくれた。…フフツ神人たる私の、特別な従者であるというのに二本指にしてみれば、とんだ出来損ないだつたろうな。」

「いや、二本指の使いにしては素晴らしい人物とも言える」

「ふふふ…ブライヴも、イジーも、私には過ぎた者たちだよ。知つてゐるはずなのにな。私の行く暗い路の先を。私がいつか、すべてを裏切り、棄てることを…ああ、お前も加えるべきだつたか？お人よしということでは、奴らとよい勝負だらうしな」

「…この姿だと、どうにも気が緩むな。余計なことを喋つてしまつた…忘れる。いいな」「全身全靈を持つて脳に刻みつけるつ」

「だーかーらー、忘れるーつ」

雷を纏つた銀の零達を退けた先、災の影がそこにいた。

百戦錬磨のシルシティに影如きでは勝てやしない。

徹底的に切り刻まれ、絶命した。

「…見事な戦いだつた。感謝する。手間をかけさせてしまつたな」

「言うてみごとでもない気がするが（腐れブレス）」

「まあそう言うな。だが、これでやつと、あやつに至れる。…お別れだな、お前」

「…成し遂げるんだぞ」

「ああ。…プライヴとイジーに、伝えてくれ。…愛していると」

ラニはそう言い今度は身体を残して居なくなつてしまつた。しかし、シルシティはすぐには別のアイテムを見つける。『王家の鍵』。ラニにまつわる王家…。シルシティは迷わずレナラのいる部屋の宝箱へ向かつた。シルシティの考えは正しく、その中にはあるアイテムが入つていた。

『暗月の指輪』

⋮。彼は走り出した。

腐れの沼を越え。

悪意の流星を討ち滅ぼし。

暗月の騎士の竜を打ち破り。

大教会に穿たれた大穴。その最奥にラニはいた。

身体はボロボロで人形の身体の体内が丸見えで、しかし二本指には勝利したようだ。シルシティは迷わない。ボロボロのラニの薬指に『暗月の指輪』をそつと指した。

「…そうか。お前：いや貴方が私の王だつたのだな。」

「そうだとも。わしこそが君の王だよ」

「…ふふつ。忠告など無駄な事だつたか。だが、嬉しいよ。貴方が私の王で良かつた。お前は王の道を歩んでくれ。そして、互いに全てが再び見えるとしよう。」

「ああ。すぐに会えるとも、待つていてくれよ。」

「待つていてるよ、私の貴方…ふふふ」

……

……

「その後の試練なんぞもう蛇足よな」

「ラブラブじやねえか：」

「次に、わしのスキルをば」

「おー」

「といきたいところなんだが、話すにしても、実はどう言うスキルがあるかわしにも分からん。そこでな、わしを食えんかな？ヴエルドラみたいに」

ええ…そんな無茶苦茶な事できんのか？
 『解。対象に抵抗されなければ可能です。』

（

シルシティのスキル：はつきり言つて無茶苦茶だ。まとめるところだ。

名前：シルシティ

種族：褪せ人

称号：外道英雄：夜の王

魔法：封印

能力：△？？能力『鮫？？三葱玖シ工』

固有能力『王の召喚』『竜体化』『君主の諸相』『大魔道士』『大祈祷師』『大戦士』

無茶苦茶だよ！

なんだよこれ：暴れまくつてんだけど…。まともに使えるのか？

『解。これらのスキルの殆どが封印されてあり、使用は困難です。』

なるほど、あれは封印されたからああなつたんだな。：いやそれでもおかしいな。それは置いといて。

使えないのか、封印は解けそうに無いのか？

『解析の結果、一番脆い『黄金霸氣』『大魔道士』『大祈祷士』『大戦士』の封印も無限牢獄よりも強力な封印が施されていました』

え、どうすんだよ。スキルなくても強いだろうけど、何があるか分からぬのにそれは不安だぞ？

『そしてこれらの封印には、主人との繋がりが確認されました』

…はい？

増える仲間達

：はい？

大賢者の爆弾発言に啞然となつてしまつた。いつたいどういうことですかね、大賢者さん？

《解。この封印は強力でありながら不完全であり十全には使えないものの能力の一部なら使うことが可能です。

どのような能力かは確認できませんでしたが…。それが先程説明した「脆い封印」です。

その封印の脆弱な部分を解析した結果、主が個体名・ヴエルドラに魔力感知を教わった時期と同じタイミングに封印が綻び始めたのが確認されました》

なるほど、時期が全く一緒ってことか。

でも、それだけだとシルシティの能力と俺が繋がっている証拠としては弱くないか？

《他にも、魔物を捕食して、能力を手に入れた時期の綻びも確認されました。》

なるほど、これは繋がつてますね…。でも、封印が脆くなる原因がわからないな、なんだろう。俺が強くなつたとき？新しい能力を手に入れた時、とかか？

まあ、とりあえずシルシティに伝えるか。

（

「なるほどのう。心当たりのある能力ばかりじゃなあ。」

「心当たり？」

「祈祷も魔法も狭間ではよう使つとつた。戦士と言うのは、わしが色んな武器を振るつていたからかもしれんな。」

「じゃあ、『黄金霸気』は？」

どんな能力か分からなかつたので、もう心当たりのある本人に聞くしかないんだが。「うーむ、それが心当たりがないんじやよ。せいぜいわしが夜の王だつてことぐらいじや。」

「霸気だもんな。そういうえば能力の一部なら使えるらしいけど」

「ほう？：あーはいはい。わしが使つてた魔法や祈祷や武器の一部がまだ使えるらしい。」

「おお、魔法使いか。良いなあ。一部つてのは？」

「祈祷や魔術の中でも上位や伝説扱いされているものは使えないらしい。武器は伝説扱いされて無い一部の武器なら使えるつてかんじじやな。祈祷は信仰心が無いと教えても使えないとおもうが、魔術なら必要なものさえ有れば貴公も使えると思うぞ？」

「!? マジ?」
「本気じや」

「マジか:じやあ、まだ時間もあるし、教えてくれよ!」

「いいぞ、いやーわしにも教え子が出来るとはな。」

「ん、先生つて言つたほうがいいか?」

「いらんよ。わしは本物の先生には遠く及ばんでの。じやあまずは基本の魔術から
じや」

いやー色々教えてもらつちやつたよ。教えてもらつたのは良いけど、シルシティの所
の魔術つてのは頭がいいほど威力が上がるらしい。つまり大賢者さんにも協力して
らつた場合の威力は…。

「分かつたかな?じやあそこの木に『輝石のつぶて』を打つてみな」

「うん。それつ
ドゴツ:」

「嘘だろ…?」

「うーん、なんじやこの威力。知力999かな?」

「強すぎるよ!大丈夫かこれ」

「いや一段々楽しくなってきたぞ、次は『輝石の大つぶて』じゃ！」

)

一時はどうなることかと思つたけど結構楽しかつた。

本当は頑張つて作つたオリジナル魔法とかがあるらしいけど、それも封印されたらしい。上位とか伝説並つて事かよ。

さて、次は俺が話す番だ。

「じゃあ、俺のことも話そうかな」

「おー、いいのぉ」

「いやお前ほど面白くはならないからな？」

「なに、別の世界の話つてだけでも興奮するもんじやよ」

「どうか、確かに。確かに別世界の話なんて聞く機会無いもんな。そして俺は俺の覚えてる限りの記憶の内容を話すこととした。

住んでた街とか、仕事の話とか。先に結婚した後輩、お世話になつた先輩、ひどい取引先、それに友達や両親。そして……俺の最期。

「なるほどのう……中々発展している世界なんじやな」

「そうだなあ。この世界でもそれくらいの生活がしたいな」

「お、いいじや無いか。出来る限りの協力をしよう。」

「是非頼むよ。完成した暁には体験者第二号にしてやろう」

「いいの。お。楽しみになつてきたわ！」

「……あれ、そういえば」

「なんじや？」

「お前つてこの世界に来る瞬間つてどう言う状況だつたんだ？」

「ああ、実験してたら突然な」

「え、大丈夫か？お前嫁さんがいただろ？」

「大丈夫じや。ラニはわしに放浪癖があるのを知つとる」

「……それならまあ、なんとかなるかもな。」

「もうツツコむのも疲れてきた。とは言え、割と平和な時間を過ごしていたんだが……」

「……む」

「ん？今度はなんじや？」

「多分牙狼族だ。それなりの魔力をもつた奴らが大勢来てるぞ」

「出番じやな。初の防衛戦じや。気合い入れていくぞ。」

「おう。絶対に勝つぞ。」

「もちろん」

ゴブリン達が柵の内側にいることを確認した俺たちは門の前で待つことにした。そこは平原に面していて、走ってくる牙狼族がよく見えた。

ウオーリー

「うつせえ、しかも丸見えじやないか。殲滅する気あるんか？」

「多分格下だからって油断してんかよ お前は油断すんなよ」
「当たリ前ジヤ。犬は強ハヒ冒頭が決まつヒる。」

「ふふつ、どう言う相場だよ。全く…」

軽口を言い合っている内に牙狼族が俺たちの目の前にやつて來た。もう真夜中であり、空には満月が登っている。

「明るい月だな。異世界の月もなかなかどうして、美しい」

「でつかいな、いつか月見でもしようか。さて、おい！そこで止まれ。このまま引き返すのならば何もしない。さつさと立ち去るがいい！」

まずは話し合い。ゴブリン達が言うには話はできるらしい。どう出るか…うおつ！

サケサケサケ
アシャー

あーあ。柵に施した仕掛けで、突撃した狼がどんどんバラバラになつていく。
たいな蜘蛛糸を張つてあるから、突撃すればご覧の通り、と言うわけだ。

さらに柵には矢狭間があり、ゴブリン達から一方的に矢を受けることになる。下手く

そな弓術でも何発も撃てばさすがに当たる。突撃して運良く生き残ったやつも暫くすれば死んでいた。まあ所詮ケモノだ。この程度のケモノ如きが俺に勝つなど、ありえない。

…と、群れのボスが動き出したな。周りから見たら消えたように見えるかもしけんが、俺からすれば欠伸が出るようなゆつたりとした動きだ。

おつとそこにも粘糸が貼つてあるぞ。案の定引つかかるボス。その隙に俺は水刃を放ち、その首を落とした。

あれ、そう言えばシルシティはどうしたかな。…!なんだあのクソでかい棍棒!?ボスやその近くに控えている個体ほどでは無いものの結構でかい個体を殴り飛ばしたのが威圧になつてゐるのか誰も近づかない。あれなら大丈夫かな。

さて、そろそろ終わらせようか。ボスに近づいて捕食する。

『解析が完了しました。擬態・牙狼を獲得しました。固有スキル『超嗅覚、思念伝達、威圧』を獲得しました』

頭の中に大賢者の声が響く。獲得に成功したようだ。ボスが喰われたつてのに牙狼達は動く気配がない。仕方ない逃げ道を用意してやるか…

俺は牙狼のボスに擬態し、大声と一緒に威圧を放つた。

「聞け！今回だけは見逃してやる！俺に従えないならば、ここから立ち去るがいい！」

と、牙狼達に宣言する。シルシティもでかい棍棒を地面に叩きつけて威嚇している（首を捻っているのが気になるが）。これで犬どもと逃げ出すだろう。そう思つたが（我等一同、あなた方に従います！）

服従の宣言と同時に平伏されたのだ。寝そべっているようにしか見えないが。従うならばそれでいい。

こうして俺たち初の防衛戦は終結したのである。

終わつてないんだな、これが。戦いで一番面倒なのは後始末。無いのと一緒みたいな家も、ぶつ壊して壁にしたし、大体80匹の犬の面倒なんて誰がみるんだよ！とりあえずは犬とゴブリンに二体一組を組ませて一晩を過ごさせることにした。犬達はもふもふで暖かいだらうからな。

ゴブリン達が寝ている間、俺は太すぎる骨（？）を削つているシルシティに話しかけた。

「お疲れー」

「ん、お疲れ様」

「なあなあ、あのでかい棍棒なに？なんか、不思議なかんじがするんだよ」

「おお、よう気づいたな。確かにあれはただのでかい木の棍棒ではない。黄金樹つちゅ

う特別なでかい木の枯れ枝じや』

「すげえな：なんでも武器にするんだな。」

「なんでもじや無い、使えるもんだけじや。」

「聞いたことある気がするな：「何でもは知らないわよ。知つてることだけ」物語シリーズ
ズ 羽川 翼 ところでさ、あれで地面叩いて威嚇してた時首捻つてたけどなんかあつた
のか？」

「あれは威嚇じやないんじやよ。本当は『地揺らし』をするつもりだつたんじや。どうやら戦技も封印されているみたいじやな」

「戦技？」

「ああ。戦技つてのは戦士達が戦いの上で習得した技のことじや。本来わしのような褪せ人が使うには武器に刻まれた記憶を使うしか無い。わしは自分で覚えたがな。」

「どんなのがあるんだ？」

「だいぶ前に蛇の首を切つた技があつたろ？あれが『獅子切り』じや。回り込みは『獵犬のステップ』じやな。他にユニークなのは『回れ回れ』、『共撃の幻』とか…ああ、多すぎてきりが無いわい」

「色々あるんだなあ…。今度見せてよ。ところで話は変わるがお前ずっと起きてるけど
眠く無いのか？」

「眠れるけれども寝なくとも生きていけるからの。飯も食わんでも生きていける。食うけどな」

「良いなあ、便利だな。俺も飲まず食わず眠らずでも大丈夫だけど逆に飲んでも食つても味しないし眠れないんだよ。」

「あー、それは元人間なら辛いな」

「味覚は絶対手に入れる！その次には寝れるようになろうと思ってる」

「なんか良い方法がありやいいんだがねー」

そうやつて今後の話をしながら夜は更けていった：

日が昇り、ゴブリン達も起き始めた。村長を呼ばうと思つて彼らに名前がないことに気づいた。なので…

「村長、お前等を呼ぶのが不便だから名前をつけようと思う。」

「おお、名案だ。指示する時に不便だつたんじや。」

すると、ゴブリン達がざわつき始めた。

「よ、宜しいのですか？」

「名前くらいいいだろ。うーん、まずは…」

それっぽい名前をどんどんつけていく。村長にリグルド、その息子にリグル、鼻の大

きいやつにゴブタ、なんかぼーっとした顔のやつにゴブゾウ：

ゴブリンには名前をつけ終わつたんで、最後に牙狼のボスの息子に嵐牙ランガと名付けた。

その瞬間、俺からごつそり魔力が抜き取られる感覺がした。

『告。体内の魔素残量が一定値を割り込みました。低位活動状態へ移行します。完全回復までは約三日掛かります』

え、なんでそんな魔素が持つてかれるようなことが…名付けか？もしかして名前を付けると魔素が持つてかれるのか？意識ははつきりしているが、身体が崩れていく…て言うかとろけていく。半液体みたいなことになつた身体を誰かが入れ物に入れてくれたのか、身体が安定した。

(…んな…ことに…るとはな…とりあ…ず、今はやす…といい…)

どうやら壺の中に入れられたらしい。壺を覗き込み、話しかけてくるのは…声はシリティなんだが、顔が…思つたよりも女顔だつた。なんか女物の鎧着ても多少は許される顔とか言つてたけど、ここまでとは…

（

完 全 回 復 ！

なんだかんだで回復したし、魔素と魔力の総量が増えた気がする。もう一回同じことやつたらまた増えるかな…と思つたが、流石にやめておくことにする。とりあえず壺か

ら這い出る。

「おはよう。目覚めはどうかの？」

「いい感じだよ、ありがとう。ところでその顔……」

「どうじや？ 結構イケとるじやろ？」

「いや、いい顔なんだけど、絶望的に爺言葉が似合わないからさ」

「いやー矯正しようと思つたんじやがな、全然治らんからもう諦めたわ」

そう言つて壺を被るシルシティ。

「え、それ被るの？」

「え？ あー、なるほど。 そう言うことじやな。」

「うん。 そうそう。」

「ほれ、 やろう。」

『壺頭』

「そう言うことじやねえよ！ いや、俺が入つてたやつじやん？ 大丈夫？ 臭わない？」

「あ、 そう言うことか。 それは問題ない。 てかスライムの匂いつてなんじや」

「そう？ ならいいけど……これは（壺頭）？」

「貰つてくれていいぞ。 親友の証つてことで。」

「じゃあ、 ありがたく貰つておくよ。 ちょっと被るには難しい体型だから仕舞つとく

わ。」

壺頭を胃袋にしまう。

さて、村はどうなつてゐるかね。

「お目覚めですか、リムル様！」

「お、お前は村長：いや、リグルドか？お前：て言うかみんなでかくなつてね？」

「はい！我等一同は男はホブゴブリンに、女はゴブリナに進化しました！」

「ええ…」

「いや改めて見ると凄いのお。名付けが、進化がここまでとは…」

どうやら名付けの影響により、進化したらしい。しかし、男のホブゴブリンはともかく女のゴブリナは出るどこが出ていて非常に色っぽくなつてゐる。もはやメスゴブと馬鹿に出来ん。服も用意しなきやなあ。さらに、犬：いや、その姿は犬とは呼ぶには凛々し過ぎる。漆黒の体毛は艶やかな光沢を放つており、先頭の一際でかい奴なんて額にある星形の痣から見事な一本角が生えている。

「御快復、心よりお慶び仕ります！我が主よ！」

「お前ランガか!?でかくなつたなあ！」

どうやらこいつも進化したらしい。ランガの場合は『全にして個』であるらしく、牙

狼達の完全支配を成し遂げ、種族全体が進化したこと。

食糧もペアになつた狼と思念伝達が出来るようになり、行動範囲が広がるかつ、今まで狩れなかつた魔物も狩れるようになつたらしい。

しかし、強くなつたとて、問題は山積みである。衣食住の内、衣と住がひどい有様である。んー、どうしたもんか：

「じゃあ行つてくる。留守は頼んだぞ、ルーン」

「おうとも。わしがいれば万が一もあり得んじやろう」

あれから忙しなく動いた。勝利を祝つて宴をしたり、見下さない、人を襲わない等のルールを決めたり、統治をリグルドに任せたり。

その中で、少し遠くにドワーフがおり、そいつらに頼れば服や家が作れるかも、との話を聞いた。なので、ありつたけの金になるものと金を用意してもらつて、早速出發する事にした。

シルシティはその留守を受け持つてくれるらしい。ランガ達に乗つて出發した。いやー速い速い。こんだけ速けりや割と早く着くだろうな。

（

side 三人称 ゴブリンの村

留守を受け持つとは言つたが、特別することがあるわけでもないシルシティ。ふと、武器がかなり低質であることを思い出し、武器を使いややすくすることを考えた。

狩りに行こうとするリグルを呼び止め、武器を借りる。

「えーっと、君はリグル君だつたかね？」

「はい、そうですが…どうかなされましたか？」

「君のその剣を貸してほしくてね。なあにすぐ終わらせるからさ」

「わかりました。この剣は、正直ルーン様の武器よりかなり弱いと思うのですが…」

「ああ、わしが使うわけじゃない。まあ見てなさい」

狩りに行こうとするリグルを呼び止め、武器を借りる。

そう言つてシルシティは砥石刃を取り出した。砥石刃は本来なら武器に戦灰をつけたための物であるが、砥石もあるため、武器を鋭くさせることも可能である。

刃と呼べるかも怪しいその石の棒を砥石刃で研いでいく。

五分ほどで作業は完了して、まともな石の剣となつた。

「おおお…！ありがとうございます！」

「なあに構わんよ。他の奴らもやつてあげようかねえ…」

「あ、あの…」

「ん？どうかしたかね」

「不躾な願いだとは分かつてはいるのですが、弓もどうにかできませんか…？」

「いいとも、いいとも。どんどん頼つてくれ。：しかしこの弓だつたら作り直したほうがいいの。どれ、ついてきなさい」

差し出された弓は曲がつた棒に紐が張つてあるだけの弓であつた。それをどうにかするより、作り直した方が良いとシルシティは判断した。

細めの木を伐採し、縦に割り、断面を削つて、木をしならせて狭間で手に入れた紐（亞人の者より上質な弓用のもの）を張つた。紐の張り具合を確認してリグルに渡す。

「超即席じやが、さつきのよりはマシなはずじや」

「何から何まで…本当にありがとうございます！必ず大物を仕留めて見せます！」

「じやあ他の奴らの武器も強化してやるか」

「きっとみんなも喜ぶと思います」

その後、シルシティは手斧や剣を研いだり、弓を作り直したり、矢を作つた。武器が十分になつたら今度は子供達の相手を始めた。

「Y o u a r e b e a u t i f u l .」

「あははは！なにこれなにこれ！」

「Y o u a r e b e a u t i f u l .」

「すげー！」

「すごい褒めてくるよーー！」

「面白いじやろ？ 一個あげよう

「わー！ ありがとうルーン様！」

「いいなー」

「まだ沢山あるから大丈夫じやよ。 ほれ」

「やつたーー！」

「あつたかいねーー！」

「だなーーー！」

「ずっとここいたいよーーー！」

「あかんよ。 ほれ在庫はあるから寝る前に枕元にでも使いな

『ぬくもり石』

リムル達が帰つてくるまでの間。 シルシティとゴブリン達は絆を深めていく…

s i d e

リムル

「ただいまーーー！」

「あ、おかえり。その人達は…？」

「ああ、ドwarfの職人達だよ。これで服とか寝床はなんとかなるはずだ」

「おう！ぜひ任せてくれ」

「頼もしいのお。こっちではのぉ：リグルド？」

「はい。実はリムル様にお客様が来ていまして…」

やつてきていたのは別の村のゴブリンだつた。曰く、俺の配下に加えてくれとのこと。正直面倒くさいが人手がないのも事実なので、加え入れる事にした。内部から裏切られたら、その時は皆殺しだ。裏切りは許さん。殺す！と簡単に考えてしまう自分に驚きつつ、こいつらの名前も考えなければいけない事に気づき、溜息を吐くのだった…。

名前つけなきやなあとは思つてたんだけど…いや本当に多いな。4つの部族、あわせて五百ほど。

「多くね？全員の名前考えるの？」

「案を出すのはわしも協力しよう。リムルのアイデアが枯れてからだが…」

「全然それでいいよ。よし、思い立つたが吉日。早速始めるか。壺ここ置いとくから、溶けたらよろしく」

「わかった。頑張れよ」

「うん…ぎぶ」ドロドロ

「はーい一旦中止じやー」

「よっしゃ復活」

「はーい再開するぞー」

四日経ちました。やつと終わつた::

「お疲れ。やっぱ溶けたのぉ」

「いや本当に頑張つたわ::」

「ああ、頑張つたと思うぞ。リグルドも昇格おめでとう」

「はつ！ ありがたき幸せ！」

「がんばれよ。期待してるぞ」

名前を付ける際に、族長四人の内男三人にルグルド、レグルドログルド、女にリリナと名付け、ゴブリンロードとした。そして元々ゴブリンロードだつたりグルドをゴブリンクィングに昇格させたのだ。

「リムル様！ たつた今、全員の進化を確認しました！」

「よし、ご苦労。よし、早速始めるぞ。ドワーフ達の話をよく聞いて、間違ひのないよう
に家を建てるんだ。」

「了解しました！」

「おお、統治者然としておるの」

「うつせ。お前どうせしないだろ？俺が統治をする。だから、俺が困った時は協力してくれ。」

「勿論。死ね以外なら基本何でもやつてやろう」

「じゃあ、ここら辺の木全部切つてきてくんね？運ぶのは俺がやる」

「早速か。見てろよ、三十秒で終わらせてやるわ」
全ては順調。作る規模は最早町である。それは、俺たちの新たな住処。

土地の開拓の始まり。それは俺たちの…

新しい国の始まりだ。

s i d e 三人称 ジュラの大森林、広い道（名称不明）

シルシティは一人で散歩をしていた。木の伐採が一通り済んで、やることが無くなつた為だ。リムルには付近を散歩してくると言つて出掛けっていた。リムルは多少なら離れても思念伝達ができると言つていたので問題はないだろう、そうシルシティは考えながら歩いていると広い道に出た。

「随分開けておるのぉ。街道にするならここか？…ん？」

$\dots \overline{T}_s \overline{T}_s \overline{T}_s \overline{T}_s \overline{T}_s$

「…は？」

走つてくる四人の人影。だが、それよりも目立つのは馬鹿でかい蟻であつた。

「…はあ」

シルシティはいつもの得物とはまた別の得物を構える。またでかい武器：ではなく
紫色の石が付いた杖である。

『隕石の杖』。狭間の杖の頭には輝石と呼ばれる青い石がついているのだが、これは輝石ではなく名前の通り隕石が付いている。強化こそできないが、未強化でも強力な魔術補正が付いている。そしてこれから使う魔術にもピッタリの杖だ。

「ちよ、ちよつと～！どいてください！」

「あぶないからあんたも逃げるでやんす！」

「大丈夫じや、わしの後ろで見てりやあいい。」

「はあ？ 何を言つていいから隠れるのよう！」……はあ

走つてくる蟻に対しシルシティは静かに杖を構える。そしてすぐに魔法を発動させた。

紫色のオーラを纏つた三つの岩が地面から飛び出してくれる。その岩をシリシティは迷わず飛ばした。

一つは片方の牙をおり、もう一つは足を砕き、最後の一つは脳天をかち割つた。蟻は少し足をバタつかせた後、絶命した。

s i d e リムル 建設中の町

シルシティから連絡が来た。どうやら人間を保護したらしい。これが迷い込んだた
だの冒険者だつたらよかつたのだが、近辺に調査をしていた痕跡が残つていたそ
うだ。三日三晩なにも食べていなかつたらしく、手持ちの食べ物を食べさせているそ
うだ。疲労が溜まつていそうだし、悪い奴等じやなさそうなので何をしていたか聞くついで
に休ませてあげたい、とのこと。

(ちなみに何を食べさせてるんだ?)

(茹でエビじや。結構好評じやよ)

(いいなあ)

臨時で用意したテントにて。

「初めまして、俺はカバル。一応このパーティのリーダーだ。こいつがエレンで、こつち
がギド。Bランクの冒険者だ」

「初めまして！エレンですう！」

「ども、ギドと言いやす。お見知りおきを！」

「で、この人が道が一緒つてことで臨時メンバーになつたシズさんだ」

「ゴクゴクゴク：シズです」

「本当にルーンさんには迷惑をかけた…すまない」

シルシティが助けたのは、洞窟で出会つた三人組だつた。洞窟ではいなかつた性別が想像できない仮面を被つた女性はシズと言うらしい。

そして、こいつに対してもある予測を立ててゐる。多分だがこいつは日本人だとと思う。

お茶を飲む仕草、正座の仕方。そんなに多くの人間を見たわけではないが正座は珍しいんじやないか？

…つといかん俺も自己紹介をしよう。

「初めまして！俺はスライムのリムル。悪いスライムじやないよ！」

「ぶふつ！」

飲んでいたお茶を吐き出すシズ。仮面に阻まれ飛び散ることはなかつた。

確かに渾身のギヤグではあつたがこんなにウケるとはな。改めて、三人組から事情を聞く事にした。

怪しい事が起きてないか調べて来いと言われここにきたらしい。そして怪しいものなんて言わてもわかんないよと愚痴を言い始める始末。

あと、蟻に追いかけられたのは大岩に開いた怪しい穴を、コレダ！と剣を突き刺したらでかい蟻：巨大妖蟻の巣だったらしい。何やつてんの？

疑う事を知らんのか聞いたことも聞いてないこともべらべらしゃべる。

その間シルシティはシズと話していたらしい。何か錠剤を渡している。シズはそれを迷わず飲んだ。

流石に毒を飲ませることはないと思うが：後で何を飲ませたか聞かなきやな。

「つてかそんなに怪しいものなんてここら辺にあるか？強いて言うなら洞窟ぐらいじやない？」

「いや、あそこには何もなかつたんです。邪龍が封印されてたらしいんですけど、中で二週間も調べたのに何にもなかつたんですよ！ほんと、骨折り損のくたびれ儲けって感じですう…」

「つてバカ！それは言つたらまずいって！」

「あー！知らないでやんす！」

どうやら口を滑らせたらしい。本当に何やつてんだ：

それからは口を滑らせたから、隠しても仕方ないとでも言わんばかりに色々話していく

れる。町を作つてゐる事に関して聞いてみたが、流石に國の行動はわからないそうだ。

色々聞いたり話したりしてたらもういい時間である。

三人は町（完成していない）に泊めてやる事にした。俺が引き止めてしまつたのに、さあ帰れはできない。

「リムル・シズさんについて話があるんじやが…時間あるか…？」

「ん？ 別に大丈夫だけど…？」

随分深刻そうだ。さつき飲ませてた薬と関係があるのか？

「そうか、ありがとう。じゃあ、シズさん。説明してくれ」

「ありがとう。ルーンさん。えーっと…何から話せばいいかな」

「じゃあ出自から話すといい。元の世界のな」

「元の世界？ つてことはシズは？」

「そうリムルさんの思う通り、私は異世界人。リムルさんの悪いスライムじやないよつて言うのも他の異世界人の子に教えてもらつたの。だから思わず笑つちやつた」

「なるほどな。俺以外にもいるかもなとは思つたがこんなに早いとはな。俺は元の世界では三上悟つて名前だつたが…シズは？」

「私は井沢静江だつた。またこの名前を言う日が来るなんてね」

「あ、そう言えばあの錠剤は？ なんだつたの？」

「それはわしが説明しよう。あれは「火抑えの錠」。わしの手作りじや。百個ほど飲んで試したが、なんら影響は無かつたので安全ではある。して効果なんじやが、これは身体の中にある火に関するあらゆる物を抑える効果がある。」

「つてことはシズの身体の中には…」

「そう、私の中にはイフリートって言う上位精霊がいる」

「それがなあ、飲ませる前はもう後三十分も持たない感じだつたから有無を言わさずに飲ませたんじや」

「え、持たない？暴走しそうだつたつてことか？」

「そうじや、それで問題があるんじや」

「鎮められたから問題はないんじやないの？」

「それがあの薬がなあ、鎮めるとかじやなくてあくまでも抑えるだけなんじや。しかも、イフリートの火がかなり強くてなあ。明日の昼には限界がくる。しかもあの薬、試作品でさつきので終わりなんじや」

「それでリムルさん、お願ひがあるんだ」

「…なんだ？」

「私が暴走した時…」

「イフリートを倒してほしい」

運命の人、新たな姿、飢えた豚と喰われた鬼

「イフリートを倒してほしい」

「…それはシズの身体は大丈夫なのか？」

「もし身体が無事でも私自身、イフリートがいないと長くは持たない。だから、気にしないでいいよ」

シズはどうやらイフリートのお陰で普通の人間ではあり得ないほど長生きだつたらしい。

だが、それでも身体や精神に限界がきて、イフリートの暴走を抑えきれなくなつているらしい。今はシルシティの薬でなんとかなつてているが、やはり身体と精神が限界を迎えてしまうらしい。

…どうやら他に方法はないらしい。できることなら救いたかつた。しかし躊躇してしまえば被害が出てしまう。

…覚悟を決めなければ。

「分かった。俺が何とかして見せる。幸いにも俺には『熱変動耐性』があるから、イフリートの火にも耐え切れる筈だ」

「わしも気合いで耐えて見せよう。炎属性なら輝石の氷塊や冰霧がよく効くはずじゃ」
「ありがとう：リムルさん、シルシティさん…」

「おう、任せろ」

（

それからシズはいろんな事を話してくれた。

まずこれから戦うイフリートの話。

話しても大丈夫なのかと思ったが、イフリートが眠っている今しかないらしい。

そのあとシズは自分の身の丈を話してくれた。

自分を救つた勇者の話。

聖騎士団長になつた教え子と、自由組合と言う組合の長になつた教え子の話。
置いてきてしまつた子供たちの話。

その子たちも助けてあげて、と言われてしまつた。その時、気軽に承諾してしまつた
が、男に二言はない。やつてやろうじやないの。心強い味方シルシティもいるしな。

聞いてあげているだけでもとても楽しそうだつたが、楽しい時間はそう続かない物
だ。

「…つく…んつ…はあ…」

「…もう、限界か。リムル、準備はいいか？」

「おう。お前は？」

「わしもとびつきりのやつを用意した。よつこいせ」ドスン

「でかつ」

「これは指紋石の盾っていう大盾じや。火には大盾の中で一番強い：はず。炎の精霊なんじや、死ぬほど高い温度だと考えたほうがいい。知ってるか？焼かれて死ぬのが一番辛いらしいぞ」

「怖えこと言うなよ…」

「…つづめん…なさい…」

「謝らんでいいよ、シズさん。わしは焼く程度じや死なんぞ。溶岩の上でタップダンスができる」

「俺は効かんしな。だから、任せてくれ」

「…頼んだよ…ううう… うぐつ…うぐうあああああああ！」

俺は杖を構えた。シリシティも杖と石の塊みたいな大盾を構える。

シズは呻くのを止めると同時に静寂が訪れた。

シズの仮面にヒビが入り、そこから妖気が漂い出した。

そしてシズは詠唱始めた。

（

side 三人称 ゴブリン達の町 建設中

3

建設中の町から離れた丘、そこから火が噴き上がる様子が町からも見えた。

「あわわわわわ：大丈夫ですよねえ？何とかしてくれますよねえ？」

「大丈夫だつて！シルシティさんは巨大妖蟻をあんな簡単に倒したんだ、きっと強い。リムルさんなんてスライムなのに喋れる時点で普通じやねえし、何とかしてくれるさ、シズさんのことも…」

シリシティイーつ！

「…本当に大丈夫でやすか？」

一：多分大丈夫

噴き上がる火を見たのは三人組だけではない。

「うわー…すげえ炎つすねえ」

「うむ、まああのお二人ならば大丈夫であろうが：」

シリシティーーつ！

「シリシティ様っ!?」

リムル　名も無き丘

8

始まつて早々にシルシティが炎に巻かれた。

世界の声が響くと同時に周囲にはサラマンダー（大賢者調べ）が発生し、シズさんは炎の巨人、イフリートに変化した。そしてシズ：いや、イフリートは魔力波動を解き放つたのだ。俺はいい。衝撃はともかく、熱に関しては完全な耐性を持っている。だが、シルシティは：

「あー、死ぬかと思つたわ」

「大丈夫そうだな、心配して損した。回復薬はいるか？」

「狭間時代からのとつておきがあるから大丈夫じゃ！それよりリムル、わしがサラマンダーとやらを相手する！お前はイフリートをどうにかするんじや！」

シルシティは輝石のつぶてをそれぞれサラマンダーに撃ち、ヘイトを集めた。

そして、俺とイフリートは一騎討ちの状態となつた。

過ごした時間は短いが、同郷を苦しめ続けたことは許せない。覚悟しろよイフリート

：お前の技は俺には効かないからな。目指すは完全試合だ。
バーフエクトゲーム

先に動いたのはイフリートだつた。

炎が吹き荒れる。目の前でイフリートが分裂したのだ。

まあ知ってるんだが。やはり分身体は本体より弱いらしい。

さらに氷霧により、本調子を出せないまま消えていく。

どうせダメージは無いのだから、イフリートにのんびりと近づく。俺が油断していると見せかけてやるのだ。

ん？どうやら広範囲結界に囚われたらしい。

炎化爆獄陣。フレアサーカル イフリートが持つ技の中でも最上位の炎系範囲攻撃である。

イフリートが自分の体を氣化させ、その技を発動させようとした時、

オオオオアアアアアアアアアア!!?

文字に起こしたらそんな音。だが、聞けばわかる。それは間違いなく竜の咆哮であつた。

そこには水色の鱗の竜の頭があつた。その頭の下は…見覚えのある下半身が。

「ルーン!?」

「どいておれ！巻き込まれるぞ！」

竜の頭からシルシティの声が聞こえる。

竜の頭からブレスが吐き出される。

『告。このブレスは熱変動耐性等の耐性を持つていなければ危険なほどの冷気をもつたブレスです。また、単純にエネルギーの塊をぶつけているような物なので、聖魔耐性等が無い限り、防ぐことは困難です』

やばあ：念のため避けてよかつたわ：

ブレスが段々と弱くなり、完全に止まつた。

イフリートはひざまづいていた。イフリートはもう弱つてゐる。とある事を思いつく。

「ルーン。試したいことがあるんだがいいか？」

「ん？ いいぞ」

俺はイフリートに近づき…

『ユニークスキル『捕食者』を発動しますか？ YES／NO』

答えはもちろん、YESだ！

辺り一帯を光が包む。

「ぐわーーー！」

そして消える。

「あーびっくりした」

こいつ喧しいな…

後に残されたのは俺と、シズと、目を抑えたシルシティだつた。

「目が…」

「しまらねえな…」

あれからシズは目を覚まさない。俺やシルシティで世話をしているが、もしかしたら
…もう…

「…リム…ル…さん…?」

「！ シズ！ おいルーン！ シズが目を覚ましたぞ！」

「シズさん!? 大丈夫か!？」

「…イ…イフリートは…どうなつた…?…あの三人は…?」

「あの三人は仕事があるらしくて帰つたよ。また来るつて言つたから挨拶をしに来る
と思う」

「…めん…な…さい…私は…もう…長く無い…」

「…え?」

「…ねえ…リムルさん。最期に…お願ひがあるんだ…」

「…なんだ」

「…私を…食べておくれ…」

「は？」

「…イフリートを…食べててくれたんだろう…？…嬉しかったよ…。イフリートを取り付かせたやつには…文句を言いたかつたけどね…」

静かに語るシズ。絞り出すように…ゆっくりと…

「…私は…この世界が嫌いだ…。でもね…この世界が…憎めなかつた。まるで…あの男のようだ…。この世界に…あの男を重ねて…見ているのかもしれないな…。だからね…この世界に取り込まれたく…無いんだ…」

それを叶えることはとても容易い。しかし、その願いは俺を縛る呪縛となる。彼女の願いを、憎しみを、無念を、全て引き継ぐのだ。

しかし、彼女に安心して逝つてもらうことができるようにするためならば…迷うことは無い。それにもう引き受けてたしな。

「分かつた。貴女の想いは俺が引き継ぐ。貴女を苦しめた男の名は、何という？」

「レオン・クロムウエル…。最強の魔王の…一人…」

「約束しよう！リムル＝テンペストの名において！レオン・クロムウエルにきつちりと貴女のおもいをぶつけて、後悔させてやろう。…シリシティ？」

「わしは、また救えないのか…」

シルシティが頭を抱えてひざまづいている。そうか…。シルシティは狭間の地つて
ところで戦い続けて…。救えなかつた命があつたのか…。まともな奴は少ないと
言つてたが、いることにはいたんだろうな。救えなかつたのはそう言う奴らだつたんだ
ろうか。

「シルシティさん…、私は貴女に救われたんだよ…?」

「…?」

「私は…暴走するところだつた…。それを…貴女が止めてくれた…。あの炎化爆獄陣
だつて…発動してたら辺り一帯が焼け野原になつてしまつた…。シルシテ
イさんには感謝してゐるんだ…。だから…自分を責めないで…?」

「…分かつた。すまないな、死に際だつてのに気を使わせて」

「ううん、大丈夫さ…」

「わしも夜の王シルシティの名に誓おう。貴女の遺した願いを叶えると」

…ありがとう…： 彼女はそう呟いた。目を瞑り、眠るように息を引き取る。

《ユニークスキル捕食者を使用しますか？YES／NO》

…安らかに眠れ、俺の中で。YES、と念じる。

苦しみ続けた彼女が、せめて俺の中で覚めることのない幸せな夢を見れる様に。俺は
祈るなんてことはそうしないが、その時、久しぶりに祈つた。

)

：二つの足音が聞こえる。

コツンコツンコツン：

ズリズリズリ：

彼女は頭を上げる。幼く、可愛らしい顔立ち。そして安堵し、微笑みを浮かべた。

（ここに、いたんですね！もう私を、置いていかないで！）

背筋の伸びた人影は少女に手を差し伸べる。少女がその手を取ると、その人影はもう一つの足音の主の腰の曲がった老婆について行く様に歩き出した。

頼りない青い灯火を持つ老婆はゆっくりと進んでいく。

ある程度進むと、人影は少女を前に出す。老婆は前を指した。

そこには：

（お母さん！）

少女は走り出す。人影はもう消えていた。老婆は、少女が母の元へ辿り着いたのを見ると、足音を立たぬ様にゆっくりと去つていった。

薄幸の少女、井沢静江。彼女は正しく死んだ。眠るように、穏やかに、最期は幸せな夢を見て、死んだ。

)

シズは、逝った。

俺たちに、目標を与えて。一つは、魔王レオン・クロムウエル。もう一つは残された子供たち。

俺も、シリシティも簡単に、だが決意を持つて引き受けた。
約束を果たそう。

そして俺は彼女から三つのものを残してくれた。一つ目はユニークスキル『変質者』。名前があれだが変質する者という意味であつて変な人ということではない。

二つ目はエクストラスキル『炎熱操作』だ。そういうえばイフリートを宿していた。それが影響したのかもしれない。

そして三つ目は…

「ふふふ、ふはは、ふはははは！へーんしん！」

「おおー！」

そう！人の姿だ！

俺は早速擬態した。

あれ？擬態の時にいつも出る黒霧が出てこない。

どうなつてんだ!?と思つたら視点がちよつと高くなつた。

てか、手と足がある。

俺が体を確認している時、ふとシルシティを見ると、なんかワナワナしている。疑問に思つた次の瞬間、

「服をつ！ 着ろーつ！」

「あべしつ!?」

かつこいい鎧を叩きつけられた。

よーく調べた結果、小学生女兒みたいな見た目になつていた。何もついてないとはいひえ、裸ではまずいだろう。

シルシティの配慮には感謝しなければ。この鎧もなかなかかつこよく、竜の翼や鱗が材料となつてゐるらしい。

いらなくなるまで貸してやろうと言つてくれた。

話は変わるがこの体には、俺の息子もいなかつた。まだ使つてなかつたのに：
まあいい。分身体で確認したら見た目はすごい可愛かつたし、問題はない（？）。
ちなみに分身体は黒霧を使うことで、色々な状態にできることもわかつた。

なによりも、人の体を得た。これによる恩恵は沢山あり、その中の一つには：
「てか味覚あるんじや無いか？」

「そうだよシルシティ！ いやー何食べよつかな〜」

味覚を手に入れた！これは今まで手に入れたものの中でも上位に入るほど素晴らしいものだ！

嬉しくて小躍りしていたらシルシティが声をかけてきた。

「それなら食べてほしいものがあるんじゃ」

「お、なんだ？ 楽しみだなあ」

「用意するからちよつと待つてくれ：よつこいせ」

鍋を用意して何かを準備するシルシティ。

どうやら何かを茹でるようだ。

準備が終わつて、水を茹で始めるシルシティ。

なんかすげえ綺麗な装飾された瓶『星の雫』と言うらしい。やばそうに入つた水を塩を入れながら沸騰させた。

そしてそこに蟹をぶち込んだのだ。丸一匹である。

味付けは塩をかけたりしているので、それだろうか。

蟹を解体し始めるシルシティ。完成したようだ。

ハサミの部分を俺に渡してくれた。俺は蟹を食う機会つてのはあまりなかつたから分からぬけど、あんな豪快にやるもんなんだな。

シルシティは俺を見つめている。食べるのを待つてゐるらしい。かつて、シルシティ

が俺に蛇を差し出してきた、あの時を思い出した。つて、そんなことより。
見れば見るほどうまそだ。早速一口。

「…ツ！」

「美味いか？」

「美味い…」

「そりやよかつた」

なんて言うんだろ…。濃過ぎず、薄過ぎずの絶妙な塩加減で、とにかく美味しい！

「…」モグモグ

「…」ニコニコ

俺は一心不乱に蟹を食べて。シルシティは嬉しそうに蟹を茹で続ける。

穏やかで、幸せで。でも、約束を守る為の確かな決意を抱いた夜は、静かに更けていつた。

「あ、そういえばあの龍の頭は何？」

「ああ、あれは祈祷じや。強力だけども隙もでかい。そう言えばリムル。最近段々上位の魔法や祈祷が使えるようになつてきたんじや」「お、魔法も？また教えてくれよ」

そんな話もしながらね。

数日後

s i d e 三人称 ジュラの大森林 街から離れた地点

シルシティは訳もわからず戦っていた。おかしい、狩りについてただけのはずなのに。

相手はオーガ。一人一人が強力な力を持つた強者であつた。

一応事情があると思われるでトリーナの灯火とトリーナの剣に眠り壺という眠りに特化した装備で戦つていた。

かなり強力な眠りで戦技の範囲も広いため黒髪のオーガと紫髪のオーガの無力化には成功している。

ただ、それでもあと四人のオーガがいる。殆どの者は桃髪のオーガに魔法で眠らされてしまつた。

残つたのはランガ、ゴブタ、リグル、そしてシルシティ。

そのうちの一人、ゴブタも今は救援を出してもらう為に離脱している。

ランガは青髪と戦つており、リグルは白髪と戦つている。

シルシティは赤髪と桃髪の二人を相手にしていた。

しかしこの二人、シルシティのとつて最悪のコンビであつた。前衛の赤髪と後衛の桃髪。

赤髪に攻撃しても桃髪に攻撃しても残つた方になにかしらの方法で塞がれてしまう。実際に面白い相手であつた。

神肌の二人だつてもうちよつと隙はあつたぞ。

シルシティはそんなことを考えながら戦える辺りまだ余裕があると言える。

赤髪はその余裕がわかるようで、悔しそうにしていて、また焦つていた。

焦りからか、攻撃が読み易くなつており、全て避けられてしまう。

また、焦りとは体力を奪うものであり、実際赤髪は肩で息をしていた。その隙を見逃さずシルシティは獵犬ステップで回り込み：桃髪を狙つた。

今まで見せなかつた素早い移動に不意をつかれる二人。

シルシティはいつのまにか剣を仕舞つていた右手から巨大な竜の腕を出現させ桃髪を掴んだ。

身動きの取れない桃髪に左手の灯火による眠りの炎を吹き付ける。

傷つけることなく眠らせる優しい炎は桃髪を穏やかに眠らせた。例えそれが竜の中であつたとしても。

「さあ、これで一対一じやな。なんで戦つとるかは分からんが、とりあえずあんたらには

落ち着いて貰わないかん。」

「邪惡な魔人め…よくも姫を…！」

「何が邪惡かもいまいち分からんが…。…あらうら」

「大丈夫ですか、若」

「こつちは終わつた。そつちは…かなり強いらしいな」

どうやらランガモリグルも無力化されてしまつたらしい。

怪我はしているが、死んではいないようだ。

もう二対一ではない。三対一となつた。

これはもう眠らせるだけでは無力化は無理。シルシティはそう判断した。

再び竜腕を出現させ大きめの木を一本引っこ抜き薙ぎ払う。薙ぎ払つた先にあつた小さめの木々は折れて飛んでいき、多少凸凹してはいるが広場ができた。

そこにシルシティは跳躍し、竜腕を保つたまま語りかける。

「なんだつたかな…。ああ、そうだ。『殺さない。』『無力化はする。』。両方やらなくつちやあならないのが今のわしのつらいところだな」

オーガたちは突然振るわれた凄まじい力に動けないでいる。

そんなオーガたちにシルシティは続けて言う。

「覚悟はいいか？わしはができる」ブチャラティ「覚悟はいいか？俺はができる」ジョ

ジョシリーズ

そしてシルシティは咆哮をした。

それと同時に三人のオーガが襲い掛かる。

激しい戦いが幕を開けようとしていた。

：ちなみに咆哮により、竜腕が邪魔であまり眠りの炎で焼けなかつた桃髪が目覚めてしまつてゐる。

これにより、シルシティは四対一となつた。

s i d e リムル ゴブリンたちの町

リグル達を見送つてしまらしくしてから。俺は人の姿の時用の服を作る為の採寸をしたり、洞窟で自分のスキルの実験をしたりしていた。

そしてシズさんの仮面をつけることで、今まで少し漏れていた妖気が完全に抑えられることも分かつた。

問題が一つ解決して満足した俺は地上に向かつた。

帰つたら焼肉が待つてゐるんだ！と、思つていたんだが：

洞窟から出ると凄まじい戦いの雰囲気を感じた。

どうしたもんかと考えているとゴブタが走ってきた。

曰く、救援にきたゴブリンライダー達をすぐに無力化できる実力者達がいてリグルとランガとシルシティが戦っているらしい。

シルシティはともかくリグルとランガがやばいらしい。

俺は今すぐ向かうことにした。

「ここがゴブタ！」

「はいっす！…リグルさん！？」

「怪我は…あんまり酷くないみたいだな。ランガも大丈夫そうだ。回復薬でどうにかなるだろう。で、シルシティは…!？」

シルシティは戦っていた。それも、凄まじい戦いだつた。

あの茹で蟹を食べた夜、色んな祈祷が使えるようになつたと話していた。

シルシティはそのうちの一つの龍腕を使つて戦つていた。

だが、相手は四人のオーガ。それもかなり強力そうだ。全員に立派な角が生えていた。同じような角を生やしたオーガが二人倒れていた。

生きてはいるので、無力化されたのだろう。

シルシティはと言うと、かなりきつそうだ。

体中に傷が刻まれており、その龍腕にも傷が付いていた。

「争うのを止める」

シリシティとオーガ達が動きを止める。

「ルーン！ 大丈夫か！」

「フーッ、フーッ、ああ、大丈夫だ、フーッ」

「すげえ息切らしてんじやん、代わろうか？」

「頼むわ、ふ〜」

「ま、ゆつくり休め」

さて、選手交代だ。シリシティは龍腕を消してゴブリンたちの元へと向かつた。そして何かを飲むと傷が一瞬で治った。

その様子にオーガ達が目を見開く。

イフリート戦で言つてたとつておきかな？

「もういけるぞ」

「はえーよ。…じゃああの桃髪を相手してくれ。魔法使つてたんだろ？ゴブタから大体

の話は聞いた。あ、殺すなよ？」

「任せな。いやー、何でこんなことになつたんだか」

「しらばつくれるな！ そこの邪惡な者達を使役するなどただの人間にできることではな

いだろう！我らの里を滅ぼした豚共を操ったのも貴様らの仲間なんだろう？たかが
オーク如きに我らが負けるなど考えられん。全ては貴様ら魔人達の仕業なのだろうが
！」

ん？何かすげえ誤解が生じている気がする。

オークなんてこの世界じや会つたことも無いぞ。

シルシティもそれに気づいてか、反論しようとする。

「オーク？ちょっと待て。もしかしてそりや誤解じやないでえ!?」

「むむ、確かに頭を撥ねたと思つたんじゃが…」

白髪のオークがいつのまにか背後により、シルシティの首を狙つていた。

一応当たつてはいたがシルシティの脅威の耐久力が防ぎきつたらしい。どうなつて
んだよ…：

「いたたたた…つたく、わしの後ろについたところで首は落とせんよ。まあ、もうできん
がな」

シルシティが武器を取り出した。刀の様だが…いや長い長い。軽く人の背丈ほどは
あるぞ。

「何、次は外さんぞ」

「言つておくが、わしとの戦いでまともな斬り合いができると思うなよ？外道の技の数々、見させてくれるわ」

「どうやらあそこで勝負になつた様だ。悪役ムーブやめろ。赤髪も「死ね、同胞の仇め！」と言いながらシルシティに襲い掛かろうとしたので、

「おつと、お前の相手は俺だ。ランガ、すまんが桃髪のオーガの相手をしてくれないか？」

「勿論です我が主よ。ご武運を」

「ああ、お前もな。さて赤いのと青いの。話を聞いてもらいたところだが、実力の差がわからないと話も聞いてくれないだろう？俺の実力を見せてやる」

そんなことを話しながらスキルを変質者を使って改造していく。

『告。ユニーカスキル『捕食者』の擬態、スライムの固有スキル『溶解、吸収、自己再生』をユニーク『変質者』にて統合、エクストラスキル『超速再生』を獲得しました。また、『捕食者』の擬態と、『変質者』の統合分離の合成能力として、エクストラスキル『万能変化』を獲得しました』

「ありがとう大賢者！」という訳でスキルを二つ手に入れた。さつきの白髪の斬撃は俺が喰らえば多分普通に切れるだろうから、強力な再生能力として超速再生が必要だ。万能変化も戦略を広げる上では大変便利でよい能力だ。

こんだけの能力があればまあ、勝てるだろう。

「どうした？かかつてこいよ」

「ふそつ…いへぞ」

ああ

赤髪と青髪が同時に襲いかかってきた。

青髪の一撃は腕を硬質化させて防いだが、赤髪の技量が思つたより高く腕を切り落とされてしまった。

俺はすぐさま切れた腕を掴み取り一旦後退する。

「ハン！ 片手を失つて仕舞えばもう終わりだろう？」

俺でなければごもつともなことを言いながらも、連撃止めない赤髪。青髪も的確に急所を執拗に狙つており厄介極まりない。

だが、問題はない。俺は右腕を取り込み、「超速再生」を使って再生させる。

オーガ達は驚いていた。勝ち筋が見えたのに一瞬で再生されたら、驚くのも無理はない。

v

そう言いながら仮面を外す。

驚いていたオーガ達は俺の溢れ出した妖気に危機感を抱いたのだろう。

「化け物め、貴様は絶対に殺さねばならん！焼き尽くせ、鬼王の妖炎!!?」

奥の手なのだろう、途轍もない熱を持つ炎熱攻撃を赤髪が放つた。だが……
「効かんな。そんな炎じゃ、俺は殺せないぞ？」

自分の切り札が効かない、その現実に赤髪は少しだけ怯えを見せた。だがそれを、強い意志でねじ伏せたらしい。

しかし赤髪は抑えつけた怯えを再び見せた。

原因を探ろうとした瞬間、シルシティが相手にしているはずの白髪がこちらに飛んできた。

そして、見事な着地を見せた。

「どうした！大丈夫か!?」

「いえ大丈夫です、若。ですがあれは力も技も術も我らに迫る……いや、超えるかもしけませんぞ」

オーガがそんな話をしているとシルシティが近づいてきた。

燃えている。身体と刀が燃え上がっている。

そういえば白髪のオーガは怪我こそしていないが服がところどころ焼け焦げている。
「ルーン!? なんで燃えて……ああ、あれか！」

「そう、前言つた祈祷じや。刀は炎撃で燃やした。だけどもこれちょっと強すぎる。奴の刀を折るところじやった」

祈祷とは、『火よ力を』という術のことである。

なんでも、物理の力と、火の力を強くする術らしい。武器が燃えているのは炎撃と言う戦技のせいらしい。

「…さてリムルよ。そろそろお前の力の一端を見せてやれ」

「…ああ、なるほど。いいだろう」

シルシティはオーガが動かない今、力の差を見せつけるという作戦でいくつもりらしい。

なるほど、これで心が折れれば話を聞かせる事ができるつてことか。

まあ、これで折れなかつたら…もう慈悲はない。

「いいか…これが本当の炎つてものだ！」

「見た目は似るが別物の、命を蝕む悍ましい炎も見せてやろう」

そう言いながら左手に黒炎を撒きつかせる。

シルシティも似たような色の炎で刀を燃やした。不思議なことに炎が綺麗に刀に纏わりつく。

どちらも演出くさくて笑いそうになるが、ビビらせる為なので我慢する。

「お、お兄様…あの…あの炎は…お兄様のような幻妖術の類ではありますぬ！」
と、桃髪がいい感じにビビついている。

すると、シルシティから小声が。

(リムル、もう一押しいけないかね)

(確かに決定的に折れてはいらないんだよな。よし、俺は『黒雷』を使う。お前はどうする
?)

(わしは、オリジナル祈祷でいい感じのあるから、それ使うわ)

念話で打ち合わせを終え、

「ふふふふ、その通り。だが、より面白いものを見せてやろう」

「あの炎を投げてもいいのだがな、俺だと迫力に欠ける。より強力で、迫力のあるやつを見せてやる」

俺は魔力の出力が三割程度になる様に調整する。

シルシティは跪いて祈っている。

「見ろ！これが俺の、真の力だ！」

そう言つて『黒雷』を大岩に放つた。黒雷は大岩を凄まじい音をたてながら、蒸発させた。

いや、やばすぎ。燃費はシルシティから教わった魔法の方がいいが、威力だけなら黒

雷の圧倒的勝利である。

黒雷も本当は燃費がいいんだけどな。

シリシティはもう一つの大岩を狙っている様だ。

先程の大岩と形がそつくりである。観光名所とかじやないよな？

シリシティが立ち上がり手を突き上げた。

瞬間。

『狙い澄ます古竜の雷撃』

大岩に赤い雷が直撃した。たったの一撃でその大岩は完全に蒸発した。

凄まじい威力、とんでもない飛距離。デメリットは祈りの長さと、燃費の悪さだ、と寸前の打ち合わせで聞いた。

聞いてはいても、やはり恐ろしい技である。見えていればどこまでも届くとも言つていたので、それも燃費の悪さの原因なのだろう。何発も打つてるのでちよつと締まらないが。

さて、オーガの反応次第だが。

どうか、負けを認めてくれ：

「……ここまでとはな。我等では貴様達には遠く及ばないらしい。だが俺も、力ある種、オーガの頭領として育てられたのだ。無念に散つた同胞達の恨みを晴らさんで、何が頭

領か。届かないとしても、せめて一矢報いてくれよう！」

「御伴致しましようぞ、若」

「ああ、覚悟はできている」

逆効果だった様だ。シルシティは頭を軽く抑えている。

覚悟を決めた戦士は殺さずに制圧するのは困難だ。始末するしかないのか：するとシルシティは今にも壊れそうな壺を渡してきた。

(顔にぶつけろ、眠るから)

なるほど、シルシティはまだ諦めてはいないらしい。

いいぞ、最後まで付き合つてやろう。失敗しても死にはしないだろう。

覚悟を決めたオーガ三人と、壺を持った俺ら二人。

動き出そうとしたその時、

「お待ち下さい！」

オーガ三人と、俺ら二人はその声で、動きを止めた。

その声の主は桃髪のオーガ。赤髪達の前に立つて手を広げ、制止の声を上げたのだ。
 「お兄様、考えてみてください。これだけの力を持つ魔人様が、わざわざ豚共をけしかける理由がありません。お二人の内、一人でも本気を出せば我らは皆殺しにできますよ。この方々は確かに異質ですが、里を襲つた者共とは無関係なのではないかと…」

「なんだと！だが、言われてみると…」

桃髪は続ける。

「それに、あの壺を被つた魔人様のあの竜の腕は手加減をされていました。あの力を本気で振るわれたら、死んでいましたよ？」

「よく見抜いたな、やはり後衛職つてのは厄介だな」

あの全力に見えた戦い、手加減をしていたらしい。

「まじ？」

「マジじゃ。もうちよつと力を込めれば衝撃波も発生するし、薙ぎ払つたら地面を抉つたり、掴んで叩きつけたりとか応用が効く。ただ、スタミナが無くて肩で息をするまでになつちまつた」

「そうちだつたのか…申し訳ない、追い詰められて勘違いしてしまつた様だ。どうか謝罪を受け入れてほしい」

どうやら勘違いを認めてくれたらしい。

これで一件落着…とはいかないだろうな。

「まあ、一先ず村に戻ろう。今日は宴をする予定だから和解の意も込めた宴だ。今日は焼肉だぜ？楽しんでいつてくれ」

「困つたことがあるなら助けてやろう。止むに止まれぬ事情があつたんだろう？宴の後

にでも聞かせてくれ」

オーガ達は同意してくれた。

という訳で、眠つて いる奴らを全員起こして村に戻ることにした。解決してよかつた
よ、ほんと。

（

その晩、みんなで宴をした。

久しぶりに食べる焼肉はめっちゃ美味かつた。シルシティも美味しそうに食べてい
た。

嬉しい誤算だつたのは桃髪が料理にも長けて いる事だつた。

ゴブリナ達もその技を身に付けようと一生懸命に教わつて いる。向上心があること
は良いことだな。

同じ女性の紫髪は、美味しそうに焼肉を食べて いたが料理をするタイプではないらし
い。

得意分野に合わせた事をする風習でもあつたのだろうか。

それは良いことだと思う。

俺の作る国も、そうしたいものだ。

明日、オーガ達に何があつたか聞いてみるか。

俺はそんな事を考えながら宴の夜は更けていつた：

スライム2度目のやらかし、鬼の目覚め

夜が明けた。

俺達はオーガ達に何があつたのか聞くことにした。

場所はドワーフ兄弟三男のミルドが建てた立派なログハウス。

リグルドと四人のゴブリンロードとカイジン、俺とシルシティとオーガ五人組の十四名。

リグルド達を集めたのはこの話が重要な可能性があるからだ。

なかなかの強者であるオーガ達を五人にまだ減らしてしまって、只事では無い。手加減していたとは言え、シルシティをボツコボコにしていたのだ。
一体何があつたのだろうか…。

オーガ達曰く。戦争が起き、オーガ達が敗北した。ざつとまとめるとそんな内容の話だつた。

俺とシルシティがイフリートと戦っていたくらいの時かな。
オーガ達も戦争に巻き込まれていたらしい。

森の中でも上位に位置するとされる（らしい）オーガに挑んで、勝つなど一体どう言
うことなのか。

リグルド達も驚いていた。

「…あの糞オーケどもめ！」 ドンッ

「お兄様、落ち着いてください」

赤髪はブチギレていた。まあ当然だな。

オーケ達はかなり質の良い装備をしていたらしく、里長を殺したオーケに至つては全
身を黒い鎧で包んでいたらしい。

そいつも似たような奴が四体いて、そいつらが里の精銳である戦士達を皆殺しにし、
そこから大量のオーケ達による蹂躪が始まつたとのこと。全てのオーケが全身鎧鎧で
あることから、一人一人のオーケの力もそれなりにあるだろう。

そして、そこにいたのはオーケだけでは無いと言う。

凶悪な妖気を隠そうともしない、怒り顔の仮面を付けた魔人。

「我々が勘違いしてしまつたのはその人物を見ていたからです」

「なるほど、わしは魔物を率いていて」

「「「「はい」」」」

「強力なオーラを放つていて」

「「「「「…はい」」」」

「顔を隠していたから」

「「「「「…はい」」」」

「共犯だと思つたわけじゃな？」

「「「「「…はい」」」」

「うーむ、追い詰められとつたんじやな」

まあ、仮面と壺じや話は変わつてくる。落ち着いていたならまともな判断も出来ただろう。

…いや、魔物を引き連れた壺頭はヤバいやつにしかみえない。

「そんなことよりよ、どうするリムル」

「…まあ、ここにも来るだろうな。オーガだけを殲滅する理由はない。目的もわからないし。しかも、そんなにいるのに気づかないなんて…しかも鎧なんてな。人間の国と手でも組んだか？」

「いや、オーケ強くするより自分の国の兵を強くするじやろ」

「うーん、それもそうか」

オーケの武器、鎧の出所など、調べてもいないのですぐわかるはずもなく、とりあえずわかつたのはオーケが森を侵攻していることだけだった。

で、だ。はいそうですかで終わるわけにはいかない。
ここも狙われるかもしないのにのんびりなどしていられない。みんなに意見を聞いてみるか。

「オーラークの目的は恐らくこの森の支配権だと思われます」と、リグルドが代表して答える。

「なるほど、それじゃこっちも…」

「うむ。来るじやろうな」

「うーん、どうしたもんかな…」

皆、俺の様子を伺っている。今、俺たちに考えられる選択肢は三つ。戦う。逃げる。軍門に降る。

三つ目を選べば、オーラーク達とは敵対するだろう。そもそも選ばないけどな。

それを知つてか知らずか、緊張感のある目でこちらを見つめている。
緊張感が高まっていく。

「とりあえずお茶おかわり」

「まじで言つてるのか」

シリシティはおかわりを受け取る。

緊張が緩和され「ふう…。ありがとうな」：緩和されたな。

「はあ…まあいや。オーガ達に、俺から提案があるんだ」

「…なんでしょう」

赤髪のオーガが答える。

「俺達に雇われる気はないか？」と言つても、俺が出来るのは衣食住の保証くらいだがな」「ほう、スカウトか。あれほどの強さを持つてゐるなら、かなり心強いぞ。俺達つて言わ
れてもワシが出来ることなんて：武器の手入れ…武器の提供…うーん」

「俺たちを雇う…だが、それではこの村も危ないので？」

「もとから危ないから大して変わらんよ。むしろ戦力が増える分にはありがたいぞ」

「ううなんだよ。オーケ達がどれくらいの戦力かわからない今は戦力はどんどん欲しい
んだ」

「なるほど…」

赤髪のオーガは考え込んだ。断られるかな？それは…まあ、しようがないよな。

自分達をボツコボコにしたよく分からぬ謎の壺がいるもんな。怖くてやつてらん

な「分かりました、是非よろしくお願ひします」…引き受けてくれるみたいですね。

「それは良かつた。契約期間は…オーケ達の大将討伐まででいいかな？」

「はい、それで構いません」

オーガ達との契約も決まり、取り敢えず一安心である。

しかし…さつきから赤髪とか青髪とか、こいつらに指示するときにその呼び方はあまり良く無いよな…

「じゃあ、まずは君たちに名前をあげよう」

「へ？ 何を言つて」

「おいおい、壺用意したほうがいいんじゃないかな」

「六人くらい大丈夫だつて、へーきへーき（フラグ）。名前はすぐに思いついたんだよ。お前が紅丸。^{ベニマル} お前が朱菜。^{ショナ} お前が白老。^{ハクロウ} お前が蒼影。^{ソウエイ} お前が紫苑。^{シオン} そしてお前が黒兵衛だ！」

「大丈夫か？ 前えらいことになつてたじやろ？」

「大丈夫だよ、ほら何とも…な…い…」 ポチヤン

「「「「[?]」」」

瞬間、俺の体がとける。シルシティはすかさずにその体を壺に収めた。

「それ見たことか。なんとなくダメじやろうなあとは思つていたがな、次はちゃんと名付けをする時は対策するんじやぞ

「ス、スライムだつたんですか!?」

「あ、そうか、話して無かつたか。そうだぞベニマル君。コイツはスライムでな、訳あつ

て人に変身できるんじや」

「…もしかしてシルシティ様もでしようか？」

「うむ、シユナちゃんが疑うのも無理はないが、わしは…一応人間じや。強い力を手に入
れただけの、な」

「そうですか…。あれ…？なん…だ…か…ねむ…く…
「んあ？ああ、進化すんのか。成程、しようがないな。」

「…シルシティ様、布団を持つてきましようか？」

「お、リグルド君気が利くね。是非頼む。あと、座布団を持つてきてくれないか？この壺
を飾：置いておく場所が欲しいんじや」

シルシティは壺を抱えながらオーガ達を安全な位置に移動させる。リグルド達が
持つてきた布団にオーガ達を寝かせ、壺（リムル入り）を座布団に飾：失礼、置くと、シ
ルシティは武器の手入れを始めた。封印により使えない武器も手入れをする。いざれ
くる戦いのために、自らの武器を磨く…。

「シルシティ様！お昼時ですかが致しましよう」

「じゃあここに持つててくれ。こんなデカブツ食卓に持つてくのも悪いしの」

「わかりました！ちなみに今日は湖で取れた魚のスープですよ」

「お、いいねえ」

：そんなに高尚な思いじや無いかもしれない。

s i d e 三人称 ジュラの大森林 町のはずれのログハウス

ログハウスにて、眠りについたオーガ達。その中の一人が目覚めた。名をクロベ工。オーガ達：いや、鬼人達の鍛治師である。見た目は前とそれほど変わらないが、強いて言うならば多少野性味が薄れていると言える。

さらにいうと見えない部分で凄まじい進化を遂げているが、ここでは省く。

「おや、起きたか。飯はそこにあるぞ、クロベ工君」

クロベ工に声をかける者が一人。名をシルシティ。みなさんご存知の褪せ人である。コイツは未だに武器の手入れをしていた。武器一本一本に十何分もかけてりや当然だが。

「あ、ありがとうございます。：その刀は？」

「これか、これは隕鉄の刀つて物だ。重力に由来する力を使えるイカした武器じや」「す、すごい：こんな武器オラ見たことないだ：！」

「他にも色々あるぞ。見てくか？」

「お願ひするだよッ！」

「お、おう。じゃあ次は……これはどうだ。巨人碎き」

「で、でかい……」

別世界の不思議な武器達。

人ならざる者たちに対抗するため作られた武器は

材料であつたり、形からして通常とは異なる。

降る星より生まれし者、凄まじい巨体をもつ巨人。

生まれた時から強い強者達を倒す為に狭間の人々は知恵を絞った。

その発想はクロベ工に刺激を与えるだろう。

「次は……これじやな。ミエロスの剣」

「せ、背骨……？ 悪趣味な武器だけども……」

「ギザギザだからな、敵の身体を引き裂く事によつて出血を強いることができる結構いい武器なんじや」

「凄い発想だ、オラには真似できねえ」

「真似なんてせんでいい、ここにある武器だつて真似して作つたわけじやないじやろうしな」

（

続いて目覚めたのはハクロウ。鬼人達の中で最年長の老人である。

しかし技量は恐ろしく高く、シルシティの後ろに回り込んでその首を狙えるレベルの技量である（残念ながらシルシティは首を切るより背中に突き刺した方が効くのだが）。そして進化した事で、なんと若返っている。死にかけの老人（スゴイ・シツレイ）から初老くらいまで若返った。

その技量はより研ぎ澄まされているだろう。シルシティ危うし。

「目覚めはどうかね、ハクロウ殿。飯はそこにあるぞ。温めてあるから美味しいぞ。あとクロベエはドワーフの鍛治師に会いにいったぞ」

「そうですか、有難う御座います。では遠慮なく。：武器の手入れをしているのですかな？」

「そうじやな。数が多いからだいぶ時間が掛かつとる。朝からやつてんじやが、三割も終わつとらん」

「ほほほ、よほど多いのか、一つ一つ時間をかけているからなのか…」「どつちもじやな、がはは！」

「…つかぬ事をお伺いしますが」「なんじや？」

「シルシティ殿のあの凄まじい力、そして高い技量、一体どうやって手に入れたのですか

な？」

「ああ、そりや簡単な話じや。腐つた沼、水浸しの街と聳える城、つてか魔法学校、罠だらけの城館、金色の大地、疫病蔓延る火山、巨人が住まう雪山、etc. etc. …。そしてそこらに住まう化け物達をぶつ倒す為にあらゆる手段を使えるようにしたんじや」

「…」

英雄譚。ハクロウの頭にその言葉が浮かぶ。

その遙かな旅路。想像もつかない過酷な戦い。

あの技量も筋力も謎の力も、すべてそこで手に入れたのだろうか。

「まあ、詳しいことは覚えとらん。見た目より遥かに歳を取つてゐる故、ボケとるんじや。自分で言うのもあれだが」

「それはもう、しようがないもの。受け入れるしか無いですじや」

「それもそうじやな。がはははは！」

暫くして、ハクロウも家を出る。

曰く、情けないゴブリン達に修行をつけてやるとの事。

シルシティは再び手入れに集中する。

傍らにある壺に眠る、友人の目覚めを待ちながら。

続く鬼の目覚め、あとスライムの目覚め

：目覚める。次に目覚めたのは紫髪の鬼人。名をシオンと言ふ。

脳筋のような…て言うか脳筋の彼女はシルシティと戦う際も無骨な棍棒を振り回して戦っていた。早々に眠らされてしまつたが。

さて、目覚めたそこには未だに武器の手入れをしているシルシティが。はよ終わらせろ。

「おお、起きたか、シオン君。君で…ええと…そう、三人目だ」

無心になつて武器の手入れをしていたせいで軽く記憶がとんでいる。

「ちなみに先に起きたのはクロベ工君とハクロウ君だ。二人ともそれぞれ外に出かけていったぞ」

「あ、はい。ありがとうございます」

「さてさて、君とは何を話そうかな…」

彼の中では何か話さなければならぬ流れになつてゐるらしい。別に誰もそんなことを求めてないが。

するとシオンがシルシティに問う。

「あの、リムル様は…？」

「ん？ ああ、それ。そこの壺の中」

クツシヨンの上に置かれた壺。貴重な壺とかそういう訳ではない（ある意味では貴重とも言えるが）。リムルが入っている壺である。

それなりの時間が経つたが未だ目覚めないリムル。上位存在になるほど名付けは高リスクと言うことを彼は知らなかつた。

シルシティは大変なんじやの、と他人事のように考え、話を続ける。

「君は何かしたいことがあるかね？」

「オーラ達を殺したいです！」

「ああ、そういうことじゃ無くて…」

当然とも言える返答だが、シルシティの求めている答えではない。起きがけだからこそ何かしたい事があるのでは？

そのようにもう一度言つた。

「では…身体を洗いたいですね。恥ずかしい話ですがあまり風呂に入れていくなくて」

「なつ…！（盲点だつた…ここには家も飯も服もあるが、風呂がなかつた！何故それを忘れていたんだ！至急作らなくてはならん）」

「ど、どうかしましたか？やはり自分勝手なね g 「風呂を作るぞ！」 ひやつ！？」

「シオン君、君のおかげで大事なことに気づけた！感謝するよ！」

「は、はい！」

「そうと決まれば早速技術者達に相談せにやならん！ドワーフの奴等は何処じや！」 ドタドタドタ

そう叫びながら出ていったシルシティ。数時間後、シュナが目覚める少し前に温泉が出来上がることになる。

そして少し先の話、魔国建国記と呼ばれる書物には『月光の温泉』という項目が出来上がることになる。

続いて目覚めたのはシュナ。姫と呼ばれた容姿端麗な少女。

多くの技術に精通しており、多彩な術でシルシティを苦しめた強者でもある。彼女は少しばかり不幸であった。

目覚めて早々に上半身裸の壺HENTAI頭を見てしまった。身体は傷だらけで、腹に重点的に包帯が巻かれていて痛々しかつたが、それでも男の裸は年頃（？）の女の子には目に毒である。

「…ええと、やあ。シュナ君」

「…服を着て欲しいです」

顔を真っ赤にして必死に見ない様にするシユナ。可哀想に。
しかし、不幸なことだらけでは無い。

黒き刃シリーズ
「あ、そうそう。風呂ができるから入りたかつたら行くといいぞ。場所はあつちの方
いつものを着たシルシティは風呂の完成を伝える。

「風呂…ですか。いいですね。早速入つてみても良いですか？」

「おお、構わんとも。男女分かれてるから安心すると良い。覗きを阻止する機能も付け
た」

「ここでいう覗きを阻止する機能とは目の座標が壁より高くなりそうな時にインプ像
が引きずり落として拘束するという機能である。

王たるシルシティはインプ像の作り方も心得ている。

…とは本人の弁である。

「…そう言えばシユナ君は何ができるんじやろうか。巫女だからやはり祭事かね」

早々に風呂に行つてしまつた彼女を今更呼び戻すわけにもいかず…あまり話のでき
なかつたシルシティであつた。

」

また一人目覚める。此度目覚めたのは青髪の鬼人。
名をソウエイと名付けられた。

「おはよう、ソウエイ君。調子はどうかね？まあ普通に起き上がるからいいと思うんじやけど」

「はい、問題ありません」

「おお、そりやよかつた。リムルもぶつ倒れてまで名付けをした甲斐があつたじやろうて。あつはつは」

他人の不幸を笑う屑。まあ、自業自得でも有るので仕方ないのかもしれない。

「それにしても君のあの戦い方…暗殺者を思い出す戦い方じやつたの。ハクロウ殿も背後から攻撃こそしてきてはいたが致命の一撃を決めたのは君ぐらいじやよ。あ、褒めてるからな？」

「ありがとうございます」

「もしかしたら君は隠密ならわしを余裕で上回るかもしけんな。隠れられたらわしもやばいかも」

「…そんなに弱点を言つて良いのですか？」

ソウエイは当然のことと言つた。弱点なんて身内にでも語るものではない。しかし、シルシティは続けてこう言つた。

「いや、最悪の場合は全部吹き飛ばせば良いからな。もちろん建物に被害は出さずに」
支離滅裂な思考、発言。しかしシルシティにはそれを為す技、力がある。その一端を

自身の身で味わっているソウエイは納得した。

「なるほど、確かにあれだけの力が有れば確かに為せるでしょう」

「じゃろ？とは言つても昔はそれが出来ずにボツコボコにされてたんじやがな」

そう言つたシルシティはある洞窟賢者の洞窟。例の松明はなく、怒りや星呼びが使えるステータスでも無かつたので死や封牢に閉じ込められた街典礼街オルディナ。洞窟とは違い、使えるステータスではあつたが、それでいて尚死を思い出していた。

最後の一人が目覚める。名をベニマル。赤髪の鬼人にして総大将：を継ぐ者であった。

「おはよう、君で最後：じやねえな。まだリムルが起きてねえや。まあええじやろ」

良くは無い。が、話は進む。

「さて、多分一番偉いであろう君に聞きたいことがある」

「はい、なんでしょうか」

「君たちの武器や防具は何処で手に入れたのか知りたいと思つてね。それか、誰から作り方を教わったのか」

「確か：かなり昔に、助けた人間から教えてもらつたと聞きました」

「ほーん：（なるほど、多分転生か転移した奴じやろうな。葦の地：じやなくて多分リム

ルの故郷じやろうな。それも古い時代の。やはり狭間の地からの転移者はいないかも知れん。ま、当然じやな)

「…あのー」

「んあ、どうかしたかの」

「いや、心ここに在らずといった感じでしたので」

「ああいやいや、そんな大したことじや無い。それにしても君達はなんというか…かしこまりすぎじやの。もつと碎けた感じでいいんじやぞ?」

「まあ立場的には雇つてもらう形になつてるので、これくらいは」

「それは確かにな。ま、しばらくはのんびりするんじやな。そこの壺の中身が目覚めるまでは日立つた事はせん予定だしな」

「…そういえば、リムル様は大丈夫なんですか?」

リムルを心底心配するベニマル。当然である、おそらく長いこと眠つていたであろう自分達よりも長く眠つているのだ。

もしやこのまま目覚めないなんてことも…と考えてしまう。

「いや、心配はない。名付けの度にこうなつとる」

「ええ…」

それはそれで心配になるベニマルなのだつた。

)

鬼人とリムルが寝てから三日。未だ寝ているのはリムルだけとなつた。

そして、リムルが安置されているログハウスには鬼人たちが集まつていた。シルシティが「多分リムル目覚める」という根拠の無い理由で集めたのだ。集まつた鬼人たちとシルシティはというと…

「いや、あと少しのはずなんじや」

「私はまだ待てますので、大丈夫ですよ」

「私もですシルシティ様！」

「いやそれでも…ねえ？」

「俺たちも待ちたくて待つてるので、気にしないで下さい」

割とのんびりしていた。集めてから一時間。結構経つが、未だ目覚めない。

どうしても手を離せない仕事がある！と血涙で話していたリグルドや、服や装備を整えるのに大忙しだったカイジン達も普通に仕事を終わらせてやつてきた。他にも大勢が集まつている。

「そういえばシルシティ様。リムル様とはどのようにして出会われたのですか？」

「え？ええと、そうじゃな、そう、知らん場所で彷徨つてる所で偶然出会つたんじや。んでもつて意気投合してな…」

……ようやく目が覚めた。まさかこんなに眠ることになるとは…
どうやら三日は寝ていたようである。迷惑かけちゃったな：

自分はまだ例の壺の中にいるらしい。そして外には多くの魔物たちがいる。
待つてくれているのか？そろそろ出ようかな。

「おう、ようやく目覚めたか。ちと眠りすぎじゃないかね」

「不可抗力だよ、不可抗力」

おお…！ ザワ…ザワ…

(なあシリルシティ)

(なんじや)

(これもしかしなくても心配かけちゃつた感じ？)

(うん)

いや、そりやそうだよね：いきなり溶けたら心配かけるに決まってるよね。

「リムル、じつはオーガ改め鬼人のみんなから話があるそうじゃ」

「おう。…ん？ 鬼人？」

「そう！ 実はみんな進化したんじやよ！ そうじやろ？」

「はい、リムル様の名付けにより、我々は進化することができました」

言われてみると、めちゃくちゃに変わっている。
見た目に磨きがかかつたり、若返つたりしている。

何よりめちゃくちゃ強くなってる。やっぱ進化凄え。

「つきましては、リムル様！ お願ひがあります！」

「なんだ？」

「どうか、我等の忠誠をお受け取り下さい！」

「ちゅ、忠誠！？ 別にそこまでする必要はないよ！？」

（シルシティ！ 傭兵つて忠誠まで捧げるもんだつけ！？）

（普通はせんな。しかし、鬼人たちはベニマルだとか、ソウエイだとか、立派な名前を
貰つて尚且つ進化しとる。これは多分じやが……この世界じやとんでもない恩義じやぞ）
な、なるほど……まあでも、こんなに強い奴等が仲間になるなら断る理由はないよな。
強すぎてちょっと怖いけど……

「分かったよ。じゃあよろしく頼むな。」

「……ありがとうございます！」

「おめでとう、今日から君たちも仲間じやな。はつきり言つてこの町は人材が足りとら
んから沢山働いてもらうぞ。無論わしも働いとるからかわからんことがあつたら聞く
といい」

鬼人たちの強さや技術は目に見張るものがあつた。

地獄蛾つて言う虫の糸を使つた服なんかも作つてるそうだ。

中々優れた防御力らしいが…

『告。現在着用している『竜騎士』の装備は能力が封印されており、それでいて尚強力な
防御力があります。その要因として竜の飛膜などの素材が余すことなく使われている
ためかと思われます』

まあ、竜の飛膜なんて豪華そうな素材使えばな…
しかも伸び代があるとか凄いな。

所で…：

「わたくしがリムル様のお世話をしてもいいのですよ？」

「ご安心ください！リムル様の世話は私がしつかり務めますので！」

（修羅場じやないか…（汗）

（シルシティ…！・ちよつと…！）

「んふふふふふふ」

（笑つてんじやねえぞ！分かんねえのかこの状況が！）

他人事だと思いやがつて…実際他人事なんだけどな。

「そ、その辺にしたつてくれんかシユナちゃん。ほら、交代交代で、な？」

「分かりました、シリシティ様がそこまで言うならば…」

「おお、心の友よ！ 可愛い女の子に囲まれるのは嫌いじやないしむしろ好きだが、喧嘩となるとちよつと怖いんだ！」

「何言つていいか分からぬからさ、ね？」

「ほら、リムル。他の奴等の様子も見にいくんじやろ？」

「あ、ああ、そうだな。シユナ、ベニマル達つて今何処にいるんだ？」

「リムル様が教えてくれた洞窟で模擬戦をしているらしいですよ」

「じゃあそこ行こうか。シオン、頼めるか？」

「はい！ もちろんです！」

「模擬戦か…進化前も死ぬ程強かつたのに、どんだけ強くなつとるんだか」

（

や、やべえ…何がヤバいって色々やべえ。

ベニマルの木刀が白い光纏つてるし、なんでハクロウは木刀で岩切れるんだよ。

「ええ…うそじやろ…？」

「こ、これは凄いな…」

「俺とシリシティが呆然としていると、決着がついた。

ハクロウがベニマルの首筋に木刀を当てていた。

「おや、リムル様にシルシティ様。ここは静かでいい場所ですな。教えて下さり有難うございます」

「リムル様にシルシティ様？ああ、恥ずかしいところを見せてしまつたな」「は、恥ずかしいところつて…もう刀じや勝てん気がするわ」

「え、マジで？逆に刀以外なら勝てんの？」

「ほう…」

「え、刀が得手と言うわけではないんですか？」

興味を持つたらしくハクロウと、驚くベニマル。

ちなみにシオンは眠らされていたので当然覚えていない。

「刀も得意ではあるんじやが、もつと使える武器があるつてだけじゃ。例えば…」

シルシティが話そうとしたその時、ベニマルの影から何かが出てきた。

どうやらソウエイみたいだ。影移動…こんなに便利とは。

ソウエイはどうやら報告があつたらしい。

「地獄蛾の繭の回収し、帰還する途中にリザードマンの一撃を見かけました。湿地帯から離れたここまでくるのは異常ですので一応報告を」「リザードマン？どんなやつらじや？」

「私も見たことはないんですけど、湿地帯の大きな穴蔵に住んでいるらしいですよ。あと、足に水搔きがあつて、水辺の先頭が得意だとか……」

「へー、ありがとな、シオンちゃん」

「いえいえ！滅相もございません！えへへへ」

「リザードマン？どう言うことだ…？」

どうやらベニマルは違和感があるらしく、思案をはじめた。

オーラの次はリザードマンか…これ以上の面倒ことは勘弁して欲しいな。